

第二編 先史時代

第一章 概説

松元町は薩摩半島の基部に位置している。薩摩半島の北部には出水山地があり、中部から南部にかけては金峰山地が走っている。これらは大隅半島に比べて高峻な連峰を欠き、低い丘陵台地が連なり、その間、至るところに火山が噴出し、溶岩・火山灰の堆積が見られる。これらの地形は更に浸食作用を受けて現況を呈するに至っているが、地勢は概して北部に高く、南西に低い。松元町は鹿児島市と伊集院町・日吉町・吹上町に囲まれた内陸部にあり、低い台地状を呈し、これより南方は再び高距を増して高原状となる。即ちこの地域は薩摩半島の鞍部となつて東西交通の要路となつてゐる。

町の東辺は始良カルデラ壁で、東へ急傾斜をなして下り、鹿児島市との境界は鹿児島湾側と東支那海側との分水界をなし、これより西方へ向かつては緩やかに降下し、末は伊集院町・日吉町・吹上町などを経て東支那海に没する。町の東南端部は金峰山地の一角をなして三〇〇以上の山地帯をなすが、その他の地域は、おおむね平坦な台地で畑作地帯となつており、茶畑が卓越している。

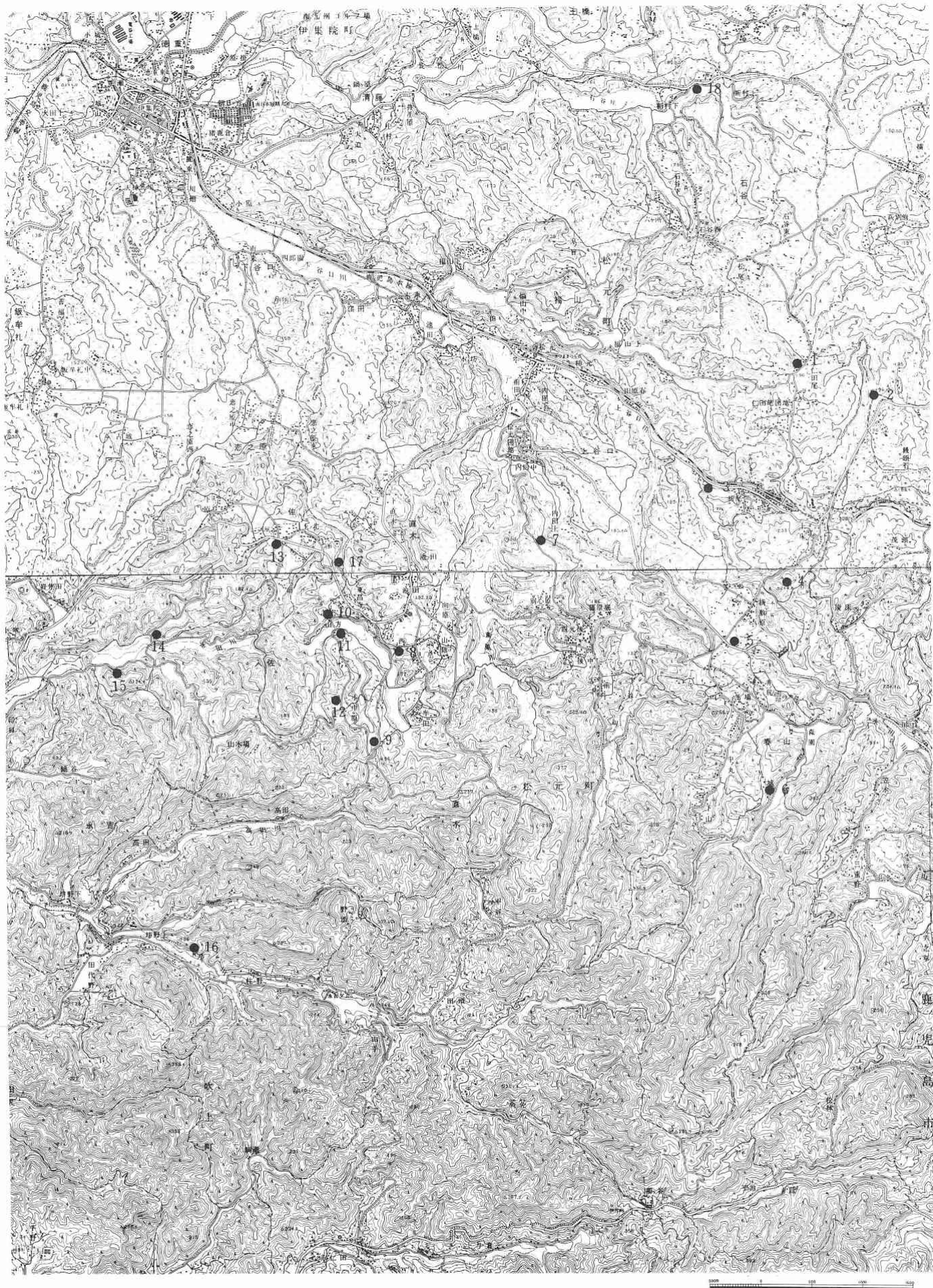
河川は分水界が東へかたよつてゐるために、東流する川は鹿児島湾に注ぐ永田川のみで、他はことごとく西流し、町の北部から中部にかけては神之川の支流の石谷川・谷口川、中部から南部へかけては永吉川及びその支流の永田川・高田川・二俣川などが、台地を下刻して流下し、それぞれ狭長な谷を形成し、谷底平地は水稻耕作に利用されている。

先史時代の遺跡は、水系と、町東辺の分水界（台地からカルデラ壁への傾斜変換線）に沿つて分布し、とくに永吉川の支流の永田川流域に多い。立地条件としては台地の縁辺部や、低地中の微高地が選ばれてゐるが、町の果辺地域や、永吉川支流の永田川流域に遺跡地がかたよつてゐるのは、これらの地域が良好な環境条件を備えているからでもあるが、一つには調査不充分のために、他地域での遺跡発見が遅れているためである。

本町で現在知られてゐる遺跡の数は十五カ所に過ぎず、そのうち調査が行われたのは直木東昌寺遺跡だけである。昭和三十七年に県が行つた遺跡調査では、各遺跡で採集された遺物が多少あつて、当時は小学校や中学校に保管されていたが現在はいかたもない。鹿児島市との境にある西別府町の木ケ暮遺跡の一部は松元町へ延びており、松元町の遺跡でもある。また吹上町の黒川洞穴

遺跡地名表

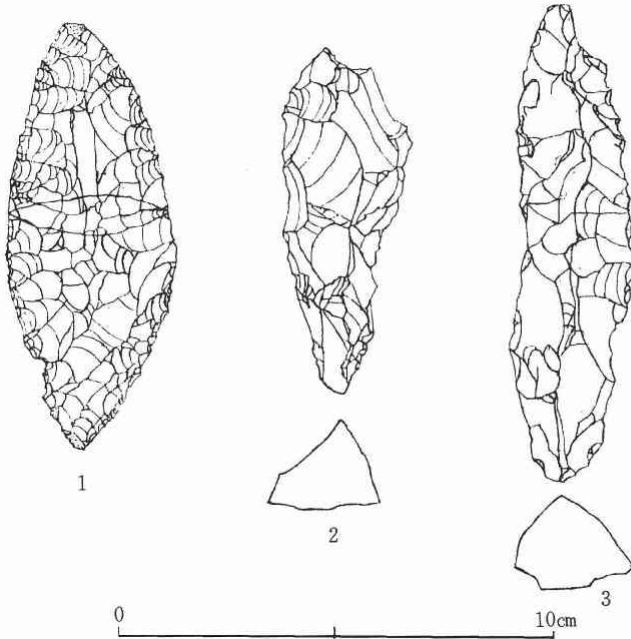
番号	遺跡名	所在地	地形	編年	遺物	備考
1	仁田尾西の原	松元町石谷仁田尾西の原	台地	古墳期	成川式土器(完形埴)	昭和二十七年頃出土
2	木ヶ暮	鹿児島市西別府町	台地	縄文後期	指宿式・市来式土器・石皿・石斧	昭和二十七年発掘 県考古学会紀要二号
3	屋村	松元町上谷口屋村	段丘	縄文早・前期	バチ形石斧(二五センチ) 押型文・条痕文土器・須惠器片・石斧	須惠器散布
4	小原・迫	松元町上床小原迫一四二九	丘陵	古墳期	石鏃・石皿・黒曜石	考古学雑誌 八・八・一一一一二
5	棧敷原	松元町春山棧敷原	台地	弥生後期	磨製石斧二 土器散布	考古学雑誌 八・八・一一一一二
6	城	松元町春山城山跡	丘陵	古墳期	土器散布地	
7	別心原	松元町直木別心原	台地	弥生後期	磨製石斧二 土器散布	
8	西畠とどん	松元町直木西畠四六七六	台地	弥生後期 古墳期	石斧磨製二・打製一・土器散布	考古学雑誌 八・八・一一一一二
9	小中原	松元町直木小中原五〇七四	台地	縄文	石斧・石鏃・石匙	
10	山方	松元町直木山方五二三五	台地	弥生後期	弥生土器片	
11	東昌寺	松元町直木東昌寺宮田 五〇一一・五〇一二	微高地	縄文早・前期 弥生前・中期 古墳期	押型文・曾畑式・条痕文・縄文土器・ 弥生前・中期土器・須惠器・石斧・石 鏃・たたき石・銅鏡	昭和二十七年発掘 県考古学会紀要二号
12	立元	松元町直木立元四九六四 山ノ迫	台地	縄文前・中期	塞ノ神式土器・石鏃	
13	松山原	松元町入佐上の前松山原 九二二の二	台地	弥生後期	土器片・石斧	
14	口ノ坪	松元町入佐口の坪	山腹		弥生式土器・たたき石	
15	旧大鳥神社	松元町入佐口の坪	台地		土師器・石斧二	
16	黒川洞穴	吹上町坊野	洞穴	縄文早・前・ 中・後・晚期 弥生前・中期	吉田式・轟式・曾畑式・春日式・阿高 式・南福寺式・指宿式・市来式・西平 式・黒川式土器・弥生前・中期土器・ 石斧・石鏃・骨・角・牙器・貝輪・垂 飾	昭和二十七年五月・ 四十年八月・四十二 年七月発掘・県考古 学会紀要二号・日本 の洞穴遺跡・考古学 ジャーナル一三三 号
18	小松迫	松元町石谷新村小松迫	台地	縄文早期	石坂式・石鏃	昭和六十年発見



第1図 松元町遺跡分布図

- 1 仁田尾西の原遺跡 2 木ヶ暮遺跡 3 屋村遺跡 4 小原遺跡 5 栈敷原遺跡 6 城遺跡 7 西田尾西の原遺跡
 8 西畠とどん遺跡 9 小中原遺跡 10 山方遺跡 11 東昌寺遺跡 12 立之遺跡 13 松山原遺跡 14 口の坪遺跡 15 旧大鳥神社遺跡
 16 吹上町黒川遺跡 17 入佐堂原石塔 18 小松迫遺跡

第2図 川内市楠元町中馬立出土の尖頭器



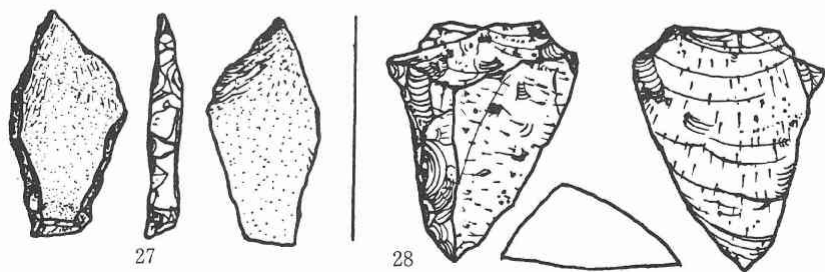
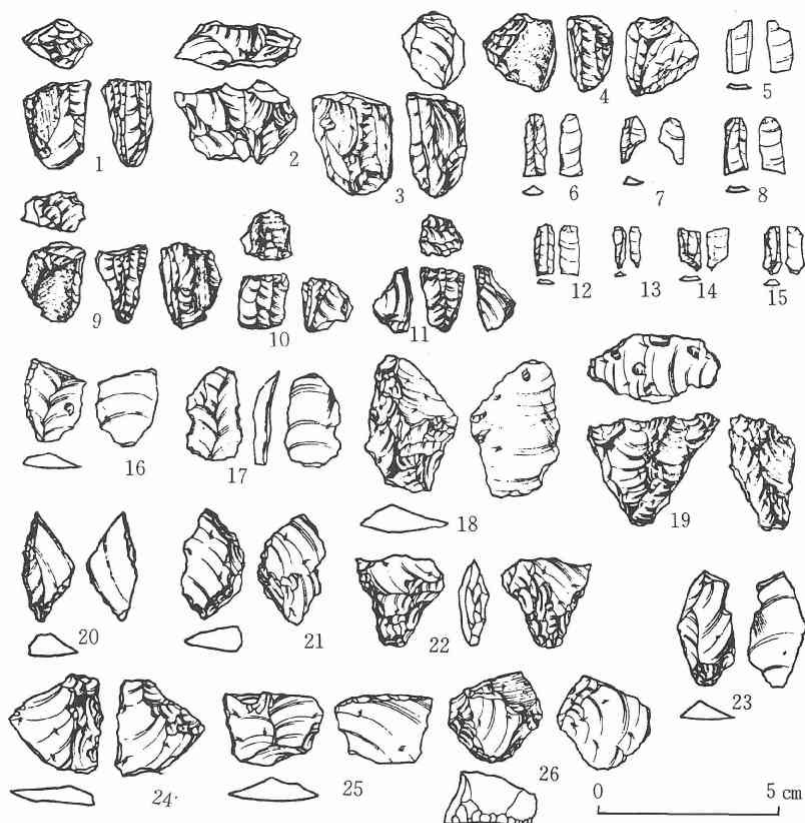
は松元町に近く、同町の先史時代を語る場合にはふれなければならぬ遺跡である。

次に町の先史時代について述べる前に順序として、その背景をなす南九州の様相を述べよう。

第一節 旧石器時代

人類の歴史のなかで始めは石器のみを使用し、土器を知らなかった期間が長く続いた。この時期を旧石器時代とよんでいる。それは地質時代の洪積世に該当する時期である。日本では旧石器時代の存在が久しく知られていなかったが、昭和二十二年に相沢忠洋が、群馬県の岩宿で関東ローム層中に石器を発見したことから、その存在が明らかになり、現在では、旧石器時代の遺跡は、北海道から九州まで各地に発見され、その数も三千方所を越え、県内でも三十七の遺跡が知られている。

鹿児島県で最初に旧石器の存在が明らかになったのは昭和二十八年五月十六日で、川内市楠元町中馬立において竹之隈静雄が尖頭器(第2図1)を発見したことによる。竹之隈は引き続いて同年六月二十日(第2図2)および七月四日(第2図3)に再度、同遺跡で尖頭器を発見している。しかしこの時は遺跡を確認するところまで調査を進めるに至っていない。



(2層-1~8, 3層-9~15, 4層-16~19, 6層上部-20~27) 0 3 cm
 (6層下部-28, 1~26-第1次調査, 27, 28第2次調査)

第3図 上場遺跡の石器 (出水郷土誌より)

鹿児島県下で旧石器時代の遺跡が調査されたのは、竹之隈の尖頭器発見後、更に十四年を経た昭和四十一年で、池水寛治が行った出水市上場遺跡の発掘調査であった。その後、上場及びその周辺遺跡の調査が数次にわたって行われ、後期旧石器時代に属する刃器文化と細石器文化が層序的に検出され、細石器に伴う住居跡も発見された。これによって南九州における旧石器時代の様相が次第に解明されていくことになった。

県の文化課が行った旧石器時代遺跡の調査では、九州縦貫自動車道関係に鹿児島市加栗山・同加治屋園、溝辺町石峰、栗野町山崎・同木場遺跡などがあり、圃場整備事業関係では指宿市小牧・同岩本遺跡、バイパス関係では川内市成岡遺跡などがあって、分布の広がりと共に内容も次第に蓄積されてきているが、いずれも後期以前に遡るものではなく、竹之隈が発見した尖頭器に類するものも調査では出土していない。第3図に上場遺跡から出土した刃器および細石器の図を掲げる。石器の材質には付近に産する黒曜石が使われており、出土の層序は、第二層細石刃、細石刃核。第三層 細石刃、細石刃核、スクレーパー、爪形文土器。第四層 切出状ナイフ形石器、小形ナイフ形石器、刃器、スクレーパー、エンド・スクレーパー、使用痕のある剥片石器、台形石器。第五

層 無遺物。第六層 切出状ナイフ形石器、柳葉形小形ナイフ、切断技法による切出状ナイフ、大形台形石器、刃器、刃器状剥片石器、スクレーパー、エンド・スクレーパー、チョッピングツール（両刃石器）という様相を示し、石器の形式が層位的に把握された。

第二節 縄文時代

旧石器時代の終末期の今から一万年余り前に土器が発明された。南九州でもこのような古い時代の土器が数カ所の遺跡で発見され、旧石器時代の細石器に伴い、あるいは、一万年余り前の堆積とされる桜島起源の火山灰層の下から出土することで、その古さが判明している。

日本では土器や石器を使用し、狩猟・漁労で生活した時代が数千年続いたが、発見の当初、器面に「縄目」の文様をもつ土器が一般的であったので、この土器を「縄文土器」とよび、その文化を縄文文化と呼ぶようになった。縄文文化は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六期に分けることができる。また縄文文化は全体として共通した性質をもつが、一面では地域的な特徴があり、それぞれの文化圏をもっている。

南九州も縄文文化のなかの、一つの地域文化圏を形成している。草創期には、紐貼付文、隆帯文、爪形文、押



第4図 早期 1 燃紋土器 2 吉田式土器 3 押型文土器

圧縄文土器などが出土し全国共通の様相が見られるが、この頃にはすでに石鏃が出現し、飛道具として弓矢が使用されたことを示している。

早期

早期になると地域的特徴が明瞭に現われてくる。南九州では独自の円筒形平底の貝殻施文土器文化の他に、関東中部系の縄文土器文化や瀬戸内系の押型文土器文化が伝播し、これらが併行して行われるという状態を呈する。やがて各系統の土器文化は互に接触し、影響し合って融合し、一つの土器文化が形作られる。この時点以後が前期である。

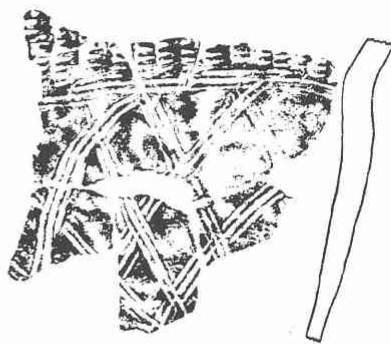
前期

前期の代表的な土器には塞ノ神式土器がある、円筒形平底の器体に、ラッパ状に開いた口縁部を付け、幾何学的直線文・連点文・縄文を施したもので、この土器は九州の各地で発見され、南九州以外の地へも伝播したことを示している。

塞ノ神式土器も後半期になると、胴部の張った平底になり、またラッパ状に開いた口縁部を省略して、円筒形平底のものも現われる。また文様も器形と共に変化し、貝殻の縁部で施文するようになる。この時期のものは前者と区別して塞ノ神B式とよび、これに対応して前者は



1 (鍋谷)



2 (平埴)

0 10cm

第5図 前期 1 塞ノ神A b式土器 2 塞ノ神B d式土器

塞ノ神A式とよんでいる。

塞ノ神B式から始まった、貝殻を施文具として使用する手法は、後続する轟式では更に一步進んで、文様のみでなく器面調整にまで使用するようになり、貝殻による条痕を有することが、轟式土器の不可欠の特徴となっている。

〈轟式〉

轟式土器は、吹上町黒川洞穴、志布志町片野洞穴・同鎌石橋遺跡、吉田町小山遺跡、熊本県宇土市轟貝塚などにおいて出土する一連の貝殻条痕土器(轟式土器)が示す層序に従って、五つの型式に分類される(第6図)。

轟式の中で最古の型式は、鎌石橋・小山で鬼界カルデラ噴出のアカホヤ層直下から出土する土器で、器面を内外ともに貝殻縁で調整したもので、更にその上に三条内外の貝殻条痕文を格子状に施したもの(第6図1・2)も見られる。これらを轟I式とする。轟I式は轟貝塚出土の轟A式(松本雅明)、片野洞穴出土の片野I式(河口貞徳)、日本山洞穴出土の條跟文土器(条痕文)(樋口清之)に該当する。轟I式に見られる格子状条痕文は塞ノ神B式にも見られるもので(第5図2)、両型式の間に継続性の存在を示し、同一系統に属することを示唆している。



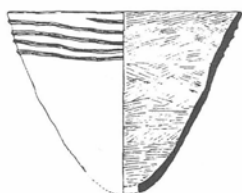
1 (鎌石橋)



2 (片野)



3 (片野)



4 (黒川)



5 (黒川)



6 (片野)



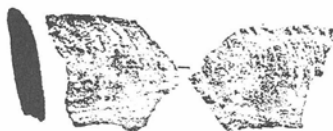
7 (片野)



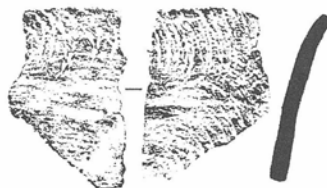
8 (鎌石橋)



9 (片野)



10 (日木山)



11 (日木山)

第6図 轟Ⅰ(1～3) 轟ⅡA(4) 轟ⅡB(5・6) 轟Ⅲ(7・8) 轟Ⅳ(9～11)

轟ⅡA式は、Ⅰ式に後続する型式である。黒川東洞穴で、次にあげる轟ⅡB式より下位の最下層から出土している。土器の内外面を貝縁で調整し、更に外面はなで仕上げを施している。深鉢形丸底の器形で、口縁部にそって数条の三角凸帯をめぐらしている(第6図4)。なお轟Ⅰ式と、轟ⅡA式との層序関係を示す資料は未発見のため両者の関係は決定的ではない。また栗野町花ノ木遺跡では、轟ⅡA式に類似した土器が、アカホヤ層より一層隔てた下層から出土した例がある。

轟ⅡB式は轟Ⅰ式および轟ⅡA式に後続する型式である。層序関係は片野・黒川両洞穴で明らかにされている。土器の内外面を貝殻縁で調整し、みみずばれ状の凸帯で器面を飾る土器である(第6図5・6)。轟式の代表的な型式で、ほとんどの轟式遺跡から出土している。

轟Ⅲ式は、轟ⅡB式に後続する土器である。片野洞穴では轟ⅡB式の上に、鎌石橋遺跡ではアカホヤ層の上部から出土している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、更に同じく貝殻縁による連点文を施し、刻目凸帯を貼付する土器(第6図7・8)である。

轟Ⅳ式は、轟Ⅲ式に後続する土器である。片野洞穴の層序でⅢ式との関係が判明している。土器の内外面を貝殻縁で調整し、更に貝殻縁によって、連続して弧文をジ

グザグに施す土器(第6図9・11)である。日本山洞穴出土の相交弧文土器(樋口清之に該当する)。

轟式についてやや詳しく述べたのは、従来轟式の型式分類が不明確であったことと、今一つは、この時期に鬼界カルデラの噴火があつて、南九州の縄文文化が大きな影響を受けたが、その時点は縄文編年のどの時期に当たるかを明らかにする必要があつたからである。

＜アカホヤ層＞

県下に広く見られるアカホヤ火山灰が、佐多岬の南西方約四〇キロメートルの海底にある巨大な鬼界カルデラ(長径二〇キロメートル・硫黄島・竹島はその北縁)の噴出によるものであることが、町田洋・新井房夫の研究によつて明らかになった。それによると、鬼界カルデラが爆発したのは今から約六千三百年前で、火砕流(幸屋火砕流)と巨大な噴煙(アカホヤ火山灰)を噴出した。アカホヤ火山灰は琉球列島中部・朝鮮半島・中部日本に達し、火口に近い薩摩・大隅両半島の中南部は火砕流に襲われ、七〇〇度の高温をもつガス状の噴出物におおわれた。従つてこの地域ではあらゆる生物が消滅したと考えられている。

新東晃一は、塞ノ神式と轟式との間に、前述のアカホヤが存在すると考え、塞ノ神式土器文化はアカホヤに

南九州縄文土器の編年

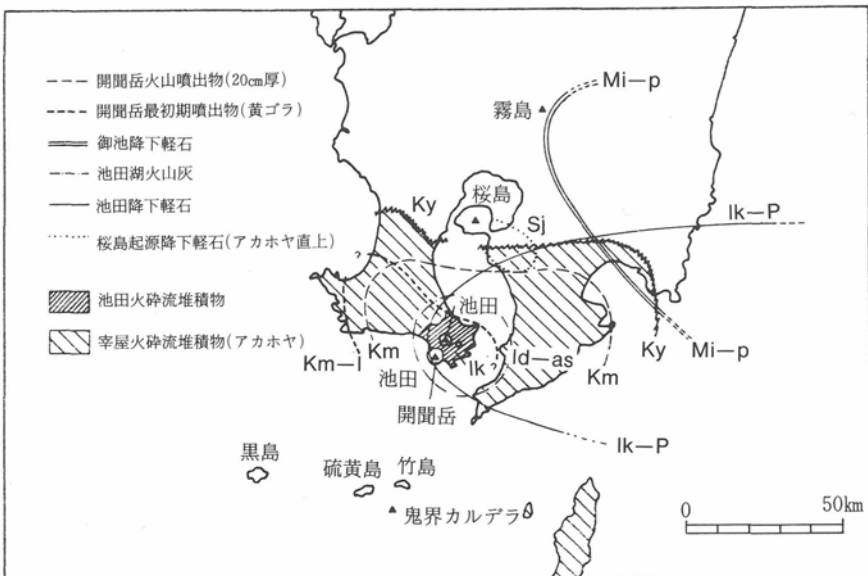
年代	時代	土器型式		
10,000 8,000 7,000 5,000 4,000 3,000 2,300	草創期	瀬戸内・北九州の系統	南九州の系統	関東・中部の系統
		爪形文	紐貼付文 隆帯文	押圧縄文
	早期		連点鋸歯文	撚糸文
			石坂式 吉田式 前平式 ○	凸帯撚糸文
			○	
	前期	押型文	円筒形条痕文	
			手向山式 平椀式 塞ノ神A a式 塞ノ神A b式	網目文
			塞ノ神B c式 塞ノ神B d式 轟I式	
	中期		轟II A式 轟II B式 轟III式 曾畑式 轟IV式 阿多V類 深浦式 春日式	
			並木式 阿高式 ○ 岩崎下層式 ○	
			南福寺式 協和式	
	後期	岩崎磨消縄文 福田K II 平城ケ平I 鐘西中岳I 三御岳II 三御岳方領	○出水式 松山市来 市来草 山I II III 来野式	岩崎上層式 指宿式 式式式 式式式
		上加世田式 入佐川式 黒井下式 夜白式		

○型式名のついていないもの ~~~~~幸屋火砕流(アカホヤ)

よって断絶し、以後の轟式土器文化は外来のものであるとした。しかし、この考えは誤りで、事実に反するものである。即ち前述した通り、鎌石橋遺跡では幸屋火砕流の直下からは轟Ⅰ式が出土し、上層からは轟Ⅲ式が出土する。小山遺跡ではアカホヤ層を挟んで、下層から轟Ⅰ式、上層から轟Ⅱ式が出土している。以上の層序によって鬼界カルデラの噴出は、塞ノ神式と轟式との中間ではなく、轟Ⅰ式と轟Ⅱ式との中間であることは明確な事実で、この関係は大分県でも確認されている（大分県史）。従って、塞ノ神式と轟式との間には文化の断絶がないことは、塞ノ神Bd式、轟Ⅰ式の項で述べた通りである。

次に鬼界カルデラの爆発が縄文文化に与えた影響について考察しよう。轟Ⅰ式と轟Ⅱ式（轟B式＝松本雅明）を比較すると、前者は貝殻縁による格子状文などを施すのに対し、後者はみみずばれ凸帯で飾られているが、共に貝殻縁による器面調整の手法を有する近縁性に富む土器型式である。両型式は、アカホヤの影響が少ないと見られる熊本県轟貝塚では、上下に相接して出土し、前後に継続する土器型式と思われる。

鹿児島県内で轟Ⅰ式と轟Ⅱ式とが出土する遺跡を求めると、吉田町小山遺跡・志布志町片野洞穴がある。これらはアカホヤの被害が少なく文化が継続したものと思わ



第7図 鹿児島県本土におけるアカホヤ以降の主要火山噴出物分布（成尾英二による）

れる。一方、志布志町鎌石橋遺跡では、幸屋火砕流の堆積層直下に轟Ⅰ式土器が出土するが、上部からは轟Ⅱ式土器を欠き、直ちに轟Ⅲ式を出土する。これは轟Ⅰ式の人々が被害を受けてしばらく無人化したためであろう。

県下には轟式土器を出土する遺跡は全域に見られ、四十力所以上を数える。このうち幸屋火砕流におおわれた地域にあつて、調査結果の明らかな遺跡名をあげると吹上町黒川洞穴、金峰町の阿多貝塚・同上焼田貝塚、上屋久町の一湊遺跡、西之表市赤木遺跡、中種子町苦浜貝塚などがある。これらの遺跡は阿多貝塚以外は、アカホヤ直後の轟Ⅱ式の時期にできた遺跡であり、阿多貝塚もアカホヤ以前は単なる遺物包含層であつたが、轟Ⅱ式の時期に貝塚を形成している。

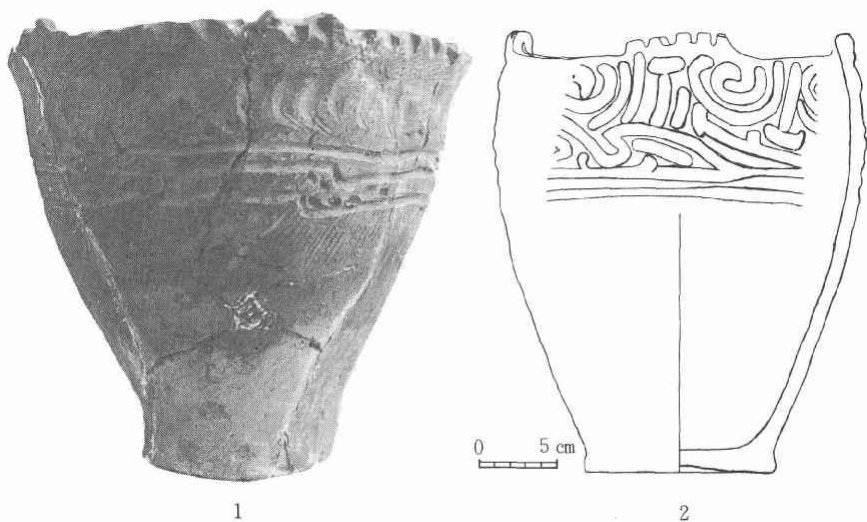
これによつて考えると、幸屋火砕流が大隅・薩摩兩半島を襲つた後、再びこの地に人類が生息するようになるまでの期間は、意外に短かく、轟Ⅰ式の終息以後で、轟Ⅱ式の継続中で一土器型式の継続期間にも満たない時間であつた。そして、生活が再開されたのは海岸地帯である。この事は海辺ほど環境条件の回復が早かつたことを示唆するものではなからうか。

幸屋火砕流によつておおわれた地域の外側での状況を見ると、吉田町小山遺跡・志布志町片野洞穴がこの地域

にある轟式の遺跡である。ここでは轟Ⅰ式を下層に、轟Ⅱ式をその上層から出土して、鬼界カルデラから遠く離れた轟貝塚と同様な層序を示し、アカホヤによつて土器文化が断絶した形跡をとどめていない。

鬼界カルデラの爆発が、南九州縄文文化に与えた影響について見ると、その時期は轟Ⅰ式の土器文化が行われていた時代であり、噴火によつて生じた幸屋火砕流におおわれた地域では、土器文化は中絶した。しかし、火砕流の被覆範囲外側のアカホヤ火山灰の降下地域では、土器文化は継続して行われ、被災地へも轟Ⅱ式・轟Ⅲ式として漸次波及していった。従つて鬼界カルデラの噴火によつて南九州の縄文文化は断絶し、外来文化によつてとつて替わられるというようなことはなく、アカホヤ前後の土器文化は全く同じ系統のものである。南九州ではそれまで見られなかつた貝塚が、アカホヤを機として、薩摩半島から種子島へかけて発生した。これもアカホヤの影響であろう。

塞ノ神式土器文化の中心は南九州にあり、九州全域に分布を広げているが、続く轟式土器文化も中九州から南九州へかけて文化の中心があり、同じく九州全域に分布が見られる。



第8図 1 岩崎下層式（岩崎） 2 阿高式（中尾田）（中尾田遺跡より）

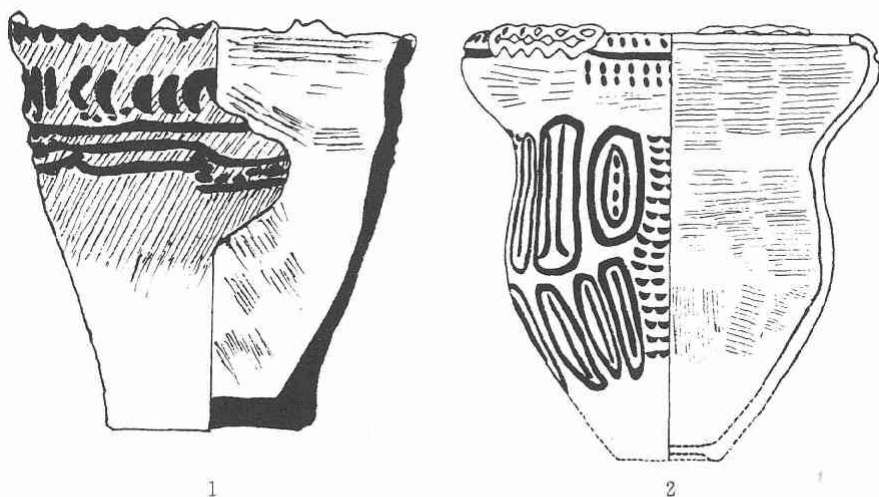
中期

中期の代表的土器は熊本県阿高貝塚出土の土器を標式とする阿高式土器である。平底深鉢形の器形に、太目の凹曲線・渦文を器面上半に施すもので、口唇部に凸起を有し、刻目を施すものも見られる。分布は九州全域に広がっているが遺跡数は少なく、完形に復元されたものは数えるほどしかない。一部の土器の胎土に滑石を混ぜる手法は、前期の曾畑式・春日式に始まっているが、中期にも受け継がれ並木式を経て、阿高式にまで及んでいる。

阿高式土器の分布は県下全域に及んでいるが、ただ薩南諸島には発見例がない。この土器文化は南島まで伝播しなかったものと見られる。主要な遺跡は県北部にあり、出水市出水貝塚・横川町中尾田遺跡が知られている。

大隅半島では地域色の濃い岩崎下層式土器が盛行している。器形・文様ともに阿高式に類するが、やや細目の凹線を用いており、特に目だった特徴は器面調整に貝殻縁を使用することである（第8図1）。胎土に雲母を混じ、底面に網代を印するものがあるのも阿高式と異なるところである。

凹線文が中期の文様の特色であるが、発生の兆はすでに前期末の春日式土器に現われている（第9図1）。春日式に出現した細目の凹線文は、並木式では浅く幅の広



第9図 1 春日式（北手牧） 2 岩崎下層式（岩崎）

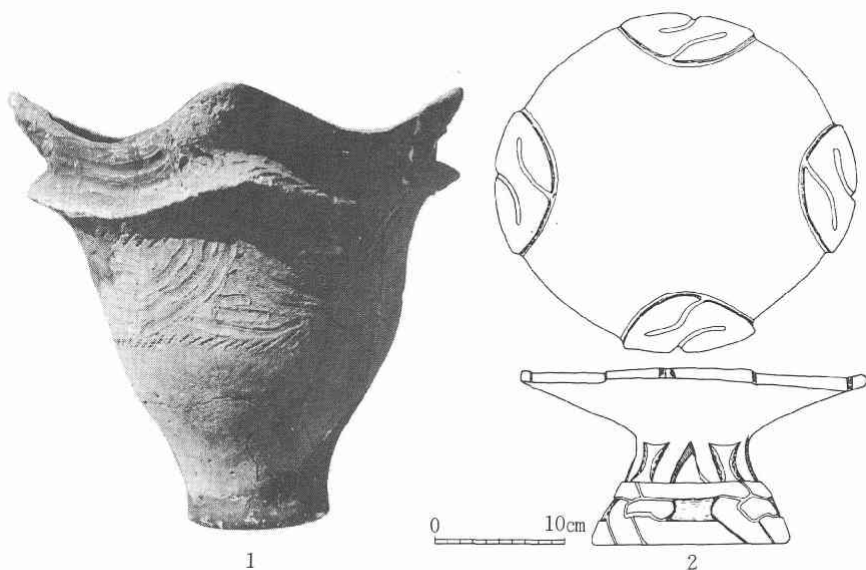
い曲線文を呈し、阿高式に至って、渦文・曲線文による勇健な凹線文が初めて完成されるのである。

阿高式以降は、熊本県および鹿児島県北部にあつては、文様が単純化し、肥厚した口縁部に集約施文される南福寺式となり、この系統は後期の出水式へ引き継がれるが、一方県南部では岩崎下層式から協和式を経て、後期の岩崎上層式へ移行し、北と南で二つの系統に分かれて、それぞれの地域で発展して行くことになる。

後期

後期を代表する土器は、市来町市来貝塚出土の土器を標式とする市来式土器である。深鉢形平底の土器であるが口縁部は波状を呈するものと、平坦なものがあり、底部が上げ底になるものも見られる。この時期になると供献用の台付皿形土器（第10図2）が表われ、生活が複雑になって来たことを示し、それだけ豊かにもなったであろう。

文様は貝殻縁を器面に押圧して施文したもので、それに浅い凹線が加えられるようになる。土器を作る際にも器面調整に貝殻を使用し、海に縁の深い文化であることを示唆している。文様を施すのは縄文土器の大きな特色の一つであるが、市来式では文様を施さない土器（素文土器）が三〇％近くを占め、煩瑣な制約の多かったと



第10図 1 市来式（草野） 2 台付皿形土器（白寿）

思われる縄文社会の中でも、ようやく実用に応ずる生活態度が芽ばえたことを示し、この後に現われる儀礼的な精製土器と実用的な粗製土器とを分けて土器作りを行う方式の先駆をなしている。

市来式の祖形

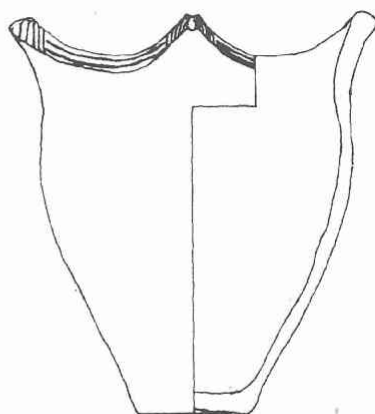
市来式は、従来、二並行の沈線文様をもつ指宿十二町下里遺跡（橋牟礼川）出土の土器を標式とする指宿式から派生すると考えられていた。この考えは誤りではない。しかし昭和五十五年に行われた上屋久町一湊松山遺跡の発掘調査によって、新しく、一型式であることが確認された松山式（第11図2）が、指宿式と市来式との間に存在することが明らかになった。また松山式は、指宿式よりも志布志町倉園遺跡出土の指宿式に類する土器（第12図2）に直結するものであることも推定されることになった。

貝塚形成と南島への伝播

南九州では貝塚を形成する遺跡は極めて少なく、縄文前期の壘式の時期と、後期の市来式の時期とに限られている。そのうち、壘式の時期の貝塚形成の原因としては、鬼界カルデラ爆発の影響もその一つと考えられ、市来式の場合は、松山式も含めて、現在から四千年ほど前に起こったとされる池田カルデラの爆発や、同じ頃の気

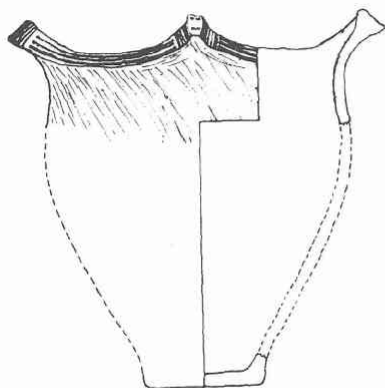


1

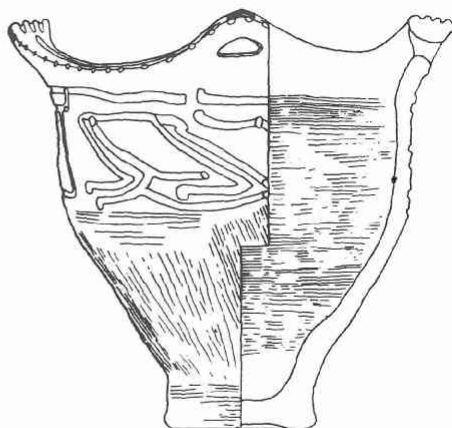


2

第11図 1 市来式（草野） 2 松山式（一湊松山）



1



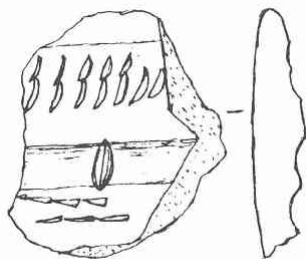
2

第12図 1 松山式（一湊松山） 2 指宿式類似の土器（倉園）

候急変（温暖・乾燥の気候↓冷涼・湿潤の気候）の影響が貝塚形成の誘因の一つになったことが推定される。

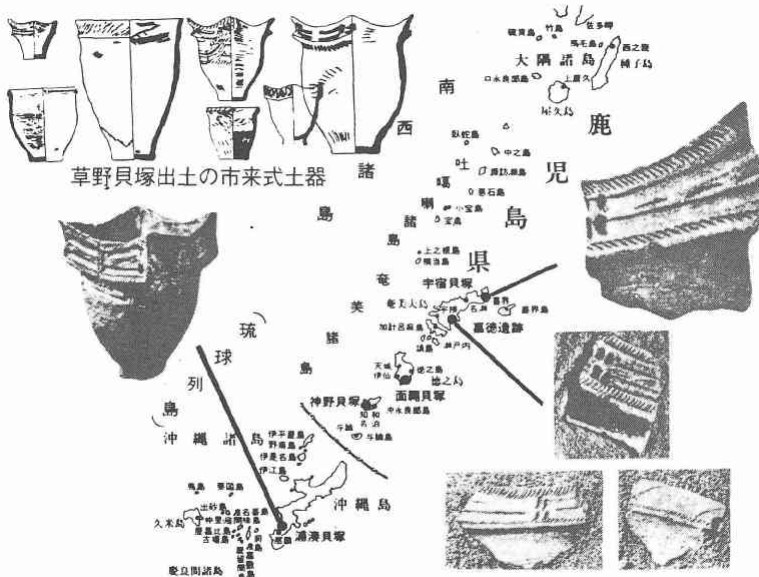
市来貝塚・草野貝塚は、市来式を主とする貝塚であるが、貝はもとより、大量の獣骨・魚骨を出土し、その生産活動の活発さを知らされるが、遺物には土器・石器の他骨角牙器などを出土し、特に注目されるのは、骨製の釣針が両遺跡で発見され、また草野貝塚からは軽石製の鯉節型丸木舟が出土していることである。市来式土器文化の担い手たちが海洋と深いかわりを持つていた人々であることを示す証拠で、一時期前の指宿式の人々にはまったく見られない特色である。

市来人達は海洋に出て盛んに漁労を行ったが、それだけにとどまらず、南に希望をもって次々に南下していった。昭和三十年に行われた九学会考古班の大島郡笠利町



第13図 市来式土器
(面縄第1貝塚)

宇宿貝塚の発掘によって、同貝塚の下層から、宇宿下層式とともに、南島で初めて市来式土器が発見された。もちろん本土からもたらされたもので、市来人達が三千五百年前に海を



第14図 南島へ伝播した市来式土器

渡つてここまで来ていたことを示す証拠である。その後の調査は、市来人達は更に南下を続け、瀬戸内町嘉徳遺跡、徳之島の伊仙町面縄第一貝塚と次々に足跡を残し、遂に沖縄県浦添市の浦添貝塚に達していたことを示している。

面縄第一貝塚出土の市来式土器(第13図)は本土から持つて来たものではなく、市来人が現地に住みついて現地の土で焼いた土器と思われる。使用した土が現地のものであるだけでなく、市来式の文様の他に奄美特有の押し引き文が土器片の下端に施されていることがそれを示している。宇宿貝塚出土の土器の中にも、純粹の市来式土器の他に、市来式と奄美特有の土器とが影響しあつて出来た土器がしばしば見られることは、市来人達は単に南島を訪れただけでなく、現地に定着した者もいたと考えられるのである。

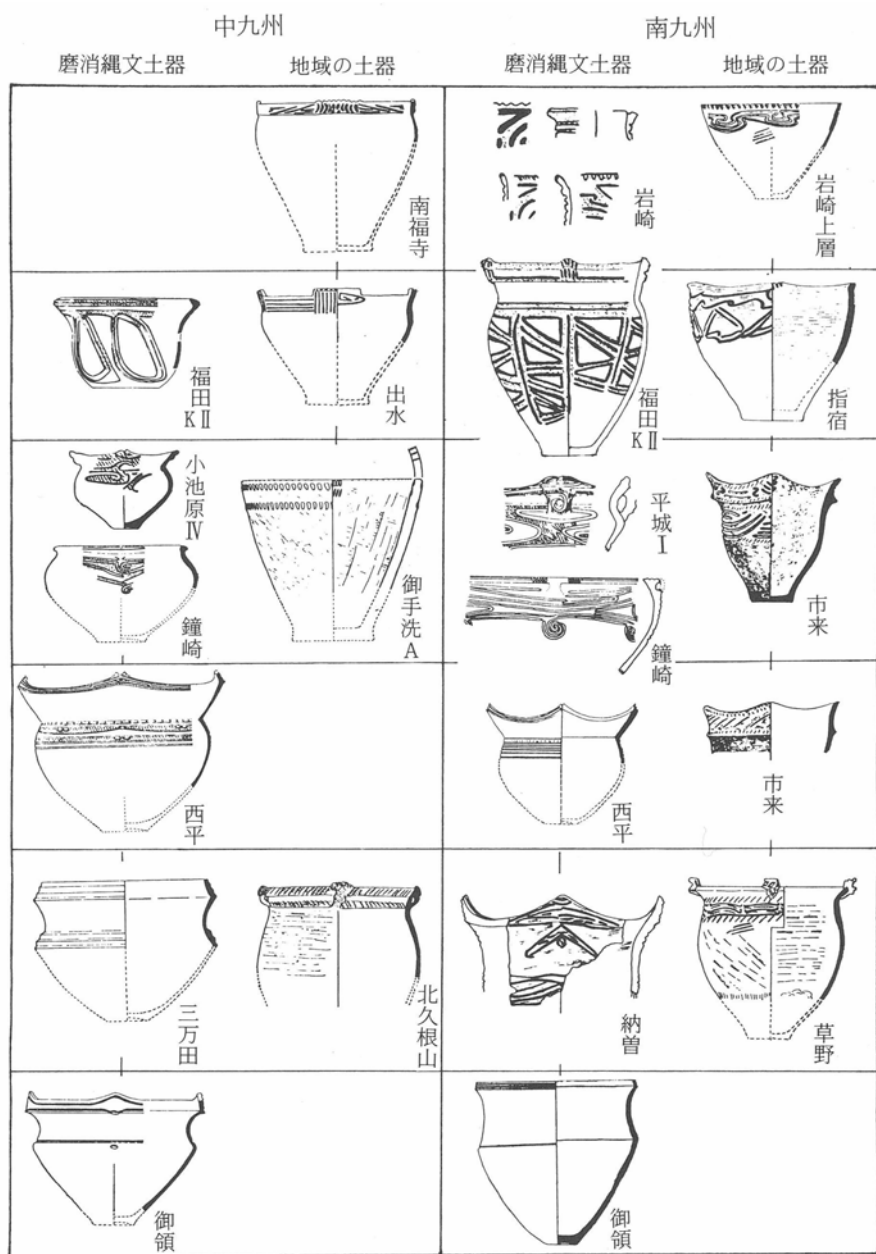
磨消縄文の波及と地域文化との交替

縄文後期には、九州地方に瀬戸内地域の磨消縄文文化が伝播する。伝播の始まりは後期初頭であり、九州全域に及ぶが、北部ほど波及の程度が密で、南部に至ると粗になる傾向があり、南九州にあつては、大隅半島の東南部においては密であるが、その他の地域では、ばらつきはあるものの一般に粗である。

中部と南部九州を実例で比較すると、後期中葉に、中部九州では磨消縄文である鐘崎式(水手洗B式)と地域の土器である水手洗A式とが共存関係で出土するが、両者の割合はおよそ等量である。同じ時期に南部九州では鐘崎式と地域の土器である市来式とが共存関係にあるが、その割合は極端に跛行的で、鐘崎式の出土量は全体の一割にも満たないものである。しかも、南部九州に見られる鐘崎式は、ほとんど他地域で作られたものを移入した土器である。

鐘崎式は福岡県玄海町の上八貝塚出土の土器を標式として名づけられたものである。瀬戸内南部から北九州地域を基盤として発生した土器文化で、瀬戸内的様相を示し、同じ型式の中に篋描の渦文に磨消縄文をくわえた精製品と、刷毛目文のある粗製品とがあり、これを鐘崎式としている。従つて中南部九州における鐘崎式の精製品と他の型式土器(水手洗A式・市来式)とが共存関係をもつて出土するのとはやや様相を異にしている。以上に述べた鐘崎式の、九州各地域における、それぞれの特色をもつた出土状況は磨消縄文文化が九州へ波及して行く過程を物語るものである。

瀬戸内地域で最初に盛行する磨消縄文の型式は中津式である。九州ではあまり普及していないが、最近(昭和



第15図 縄文後期 磨消縄文土器と地域の土器

五十九年）発掘調査が行われた志布志町曲瀬遺跡^{まがせ}では、正式の報告書が刊行されていないので詳細は不明であるが、若干の中津式と、中津式に後続する福田Ⅱ式が多量に出土し、同じく志布志町の倉園A遺跡からも、福田Ⅱ式が相当量出土していて、この地域には瀬戸内の磨消縄文文化の流入するルートがあったようである。

福田Ⅱ式に後続する彦崎Ⅰ式は出水市出水貝塚での発見があり、この時期（後期中葉）以降には瀬戸内の磨消縄文文化の移入は発見されていないようである。即ちこの後は、磨消縄文文化は鐘崎式の系統を伝えて西平式・三万田式・御領式と地域的な文化として継続し発展して行く。この過程のなかで磨消縄文文化に見られる篋磨きの技法と、無文化の傾向が結びついて黒色研磨土器が発生したのである。

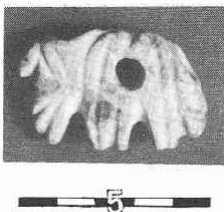
南部九州では、後期は岩崎上層式に始まり、指宿式・市来式・草野式と後続するが、この間には、磨消縄文土器とは相伴関係を保って行くが、土器の型式によって、磨消縄文文化への対応に異なるものが見られる。例えば、指宿式は順応性が強く、指宿式の文様の中に、磨消縄文、あるいは疑似磨消縄文を取り入れた土器を製作したものが見られるが、これに反し、市来式は頑固に地域性を固守して磨消縄文を取り入れていない。両者はこの

面でも対照的である。

市来式に後続する草野式の時代になると、磨消縄文文化との融合の気配を生ずるが、同時にこの時期を最後として地域土器文化は終末をつけ、磨消縄文文化の系統である黒色研磨土器（御領式）にその地位を譲り、九州全域がこの文化圏にはいることになるのである。

晩期

縄文晩期の遺跡は、数が多いが実際に発掘調査が行われたのは極く少数の遺跡にかぎられている。その中で吹上町の黒川洞穴遺跡は、九州に縄文晩期文化の存在することを初めて明らかにした遺跡で、その名は晩期の型式名として流布している。黒川洞穴については後に取り上げるので、晩期を代表する文化として上加世田式土器及び関連する文化を見よう。



第16図 獸形勾玉
(上加世田)

上加世田式は加世田市^{うえ}上加世田遺跡出土の土器を標式として名づけられた型式で、御領式に後続する晩期初頭の土器である。粗製土器と精製土器とがある。遺跡は加世田市市街地の東、加世田川下流の右岸の台地にある。



第18図 軽石製岩偶（上加世田）

の勾玉・管玉・白玉、軽石製岩偶・石棒などの他、南九州唯一の土偶も出土し、石器の素材の中には硬玉の破片

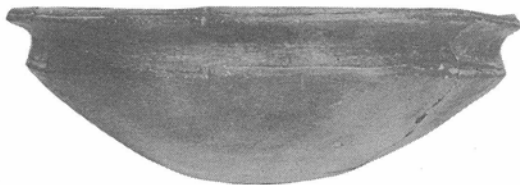


第17図 双口土器（上加世田）

遺跡の中心は、径二〇釐程の楕円形窪地で鍋底状になっており、この中に埋葬址・集石・炉址・イチイガシの貯蔵穴などがある。また多くの土器・石器・硬玉製

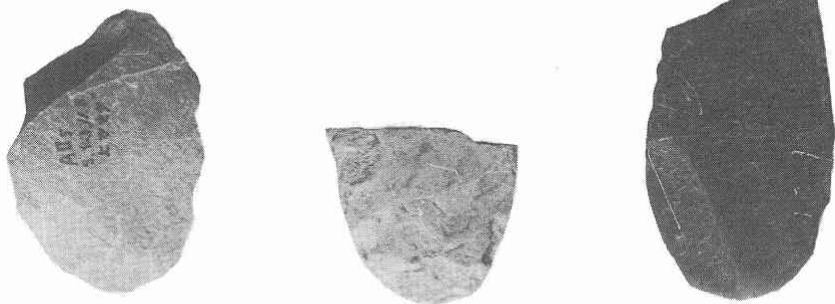


1



2

第19図 上加世田式土器 1 深鉢 2 浅鉢（上加世田）



第20図 打製石器（上加世田）

も発見され、硬玉用の砥石も出土していて、玉類も原石の移入による現地生産であったことがわかり、相当高い技術をもっていたことを示している。

獣形勾玉（第16図）と共伴した双口土器（第17図）は西日本には見られないもので、文様は東北日本の晩期に近く、新潟県糸魚川付近の硬玉産地から硬玉原石と共に移入されたものである。

軽石製岩偶には甕形土器に内蔵さ

れたものがあり、軽石製石棒は、集石中に立てられていて呪術的な性格を濃厚に示している。

石斧・石鏃など石器類には、従来の縄文的な複雑な技法を用いて製作されたものも見られるが、その数量は割合に少なく、反面、簡単な技法で、粗雑ではあるが、実用的には優れた石器を、しかも大量に生産するようになっていく。

土器生産の面でも儀礼的な性格をもつ精製土器と、実用的な粗製土器とに分離して生産するようになり、石器と同様な生産過程をたどっている。これは後期以来の実用に応ずる対応がますます明瞭になり、定着して来たこととあらわれである。

前に述べた楕円形の窪地は人工的なもので、大分県の大石遺跡（縄文晩期初頭）でも同様の遺構が発見されており、集会場とされている。縄文晩期には保守的な面を残しながら、実用的進歩的な面をもった集会が、性器信仰を軸に行われたことであろう。

第三節 弥生時代

南九州では、従来弥生土器様式の問題が取り上げられることが少なく、昭和十三年（一九三八）に東京考古学会から発行された弥生式土器聚成図録において、南九州

の弥生土器をA B C D Eの五様式に分類したのが最初であろう。その後昭和十八年（一九四三）頃、前記のC D Eを一括した内容の土器に、樋口清之は「薩隅式土器」と呼ぶことを提唱した。その後昭和二十五年（一九五〇）に寺師見国は、「鹿児島県の弥生式土器」（考古学雑誌第三六巻第一号）において鹿児島県の弥生式土器を「大隅式」、「薩摩式」、「重弧文」の三型式に分類した。大隅式は聚成図録のAに、薩摩式はC D Eに、重弧文はBにそれぞれ該当するもので、薩摩式は樋口の薩隅式に当たり、また後の成川式と同一内容のものである。

昭和三十年（一九五五）に発刊された「日本考古学講座4 弥生文化」（河出書房）では、南九州は弥生文化の波及が遅れ、中期になつてようやく伝播したものと考えられ、後進地域としての印象が強かったようである。昭和三十三年（一九五八）に、文化財保護委員会によつて行われた、山川町成川遺跡の発掘調査によつて、成川遺跡出土の主要土器は、成川式と呼ばれるようになり、調査の結果から、時期的には古墳時代に属するものとする考察が次第に定着し始め、弥生土器から除外されるようになった。

南九州では、戦前にはほとんど発掘調査が行われず、採集品を対象とした型式分類が行われただけであつた。

従つて各型式間の関係についても不明で、編年も行えない状態で戦後に至つたのである。

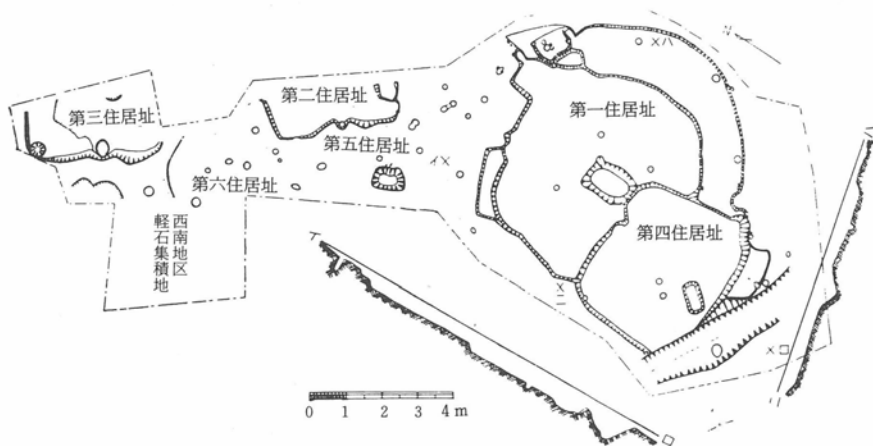
昭和二十五年（一九五〇）に行われた一の宮遺跡の発掘は、弥生遺跡の調査としては最初のものと言えよう。以後行われた山ノ口遺跡、高橋貝塚、入来遺跡、吉ヶ崎遺跡、王子遺跡、松木藺遺跡などの発掘調査によつて、南九州の弥生文化は次第に解明されることになった。

一の宮遺跡

一の宮遺跡は鹿児島市の市街地南端、新川下流の左岸の微高地にあり、現在は一の宮神社が建っている。昭和二十五年（一九五〇）に河口貞徳が発掘調査を行った。

二つの文化層が発見され、上層からは薩摩式土器（成川式）、下層からは住居址群・集石遺構とそれに伴う遺物が出土し、土器では遺跡名によつて命名した一の宮式土器（大隅式の一つ）が出土した。層序によつて土器の新旧を判別できた南九州最初の弥生遺跡である。

住居址は堅穴住居址四カ所と平地住居址二カ所が検出された。堅穴は方形三基と不正円形一基で、二・五メートル間隔で南北に並び、南端のものは不正円形で最も大きく径八・五メートルあり、中央に炉址をもち、これを囲んで四カ所の柱穴がある。東側に、幅一・五メートル、長さ七メートルの柱穴がある。長さ二メートルのベッド状遺構を有し、北端には



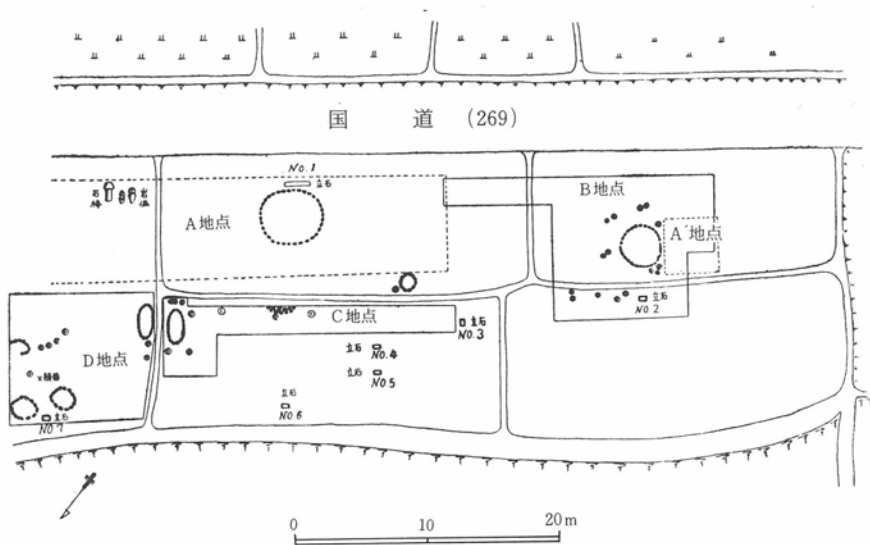
第21図 一の宮遺跡

幅一畝の張り出しも設けた特殊な構造のものである。炉の東側床面には甕形土器五個分と軽石製器台、西側床面には壺形土器片一個分、床面から東側ベッド状遺構へかけては磨製石鏃二、石庖丁一、ノミ形石斧一個が出土した。

この住居址は、南西隅にあった径四・五畝の方形住居址を埋めてその上に一部重ねて構築されたもので、床面に残された遺物から見て、弥生中期後葉の時期に属するものである。

北側二個の住居址は、境界に阻まれて完全に掘り終わっていない。うち南側のものは出土土器から見て中期中葉に属し、北側のものは、壺形土器の頸部に、瀬戸内に見られる凹線文をめぐらすものが出土しているが、時期は特定できない。

住居址群の北西側には、長さ二・五畝、幅一・五畝、高さ〇・五畝の軽石礫群があり、その両側に土壇を設け、焚火の跡を残し、床面には、それぞれ研磨された長頸壺と、甕形土器片が納められていた。集落に付随した呪術的遺構であろう。



第22図 山ノ口遺跡略図 ◎印土器



第23図 山ノ口遺跡 環状配石

山ノ口遺跡

山ノ口遺跡は、一の宮遺跡と同時期の弥生時代中期後葉の祭祀遺跡である。大根占町南端の海岸にあり、昭和三十三年（一九五八）より昭和三十六年（一九六一）にかけて、河口貞徳が三次の発掘調査を行った。

遺跡は弥生時代中期後葉に、海岸砂浜に、幅二〇^{センチ}、長さ五〇^{センチ}の範囲に、軽石礫を用いた環状配石群を構築したものである。

環状配石は、砂鉄採掘によつて破壊されたものを加えると十カ所を越えており、多少の加工を施した柱状立石を伴うものと、陰石・陽石・岩偶などを伴うものとの二つのタイプがあり、すべて同時期のものである。

立石を伴うタイプの代表的なものは、南西端のものである。内径三^{センチ}の円形環状配石（第23図）で、北西側に、幅三八^{センチ}、厚さ二六^{センチ}、高さ五四^{センチ}の立石をたて、配石を囲んで、壺形土器と甕形土器をセットで配置している。このうち西側と東側の土器セットは綺麗に飾られたものを用い、それぞれ磨製石鏃五個が添えられていた。この他丹塗された軽石製勾玉や、線刻や凹穴を施した軽石礫、裁断面に無数の罅を生じた軽石礫など、籤筮呪術に用いたと思われる用具を配し、所々に焚火の跡が見られた。

陰石などを伴うタイプとしては、遺跡の北端に近く楕円形の環状配石がある。長径一・八^{センチ}、短径一・六^{センチ}の環状配石で、南東端に幅二四^{センチ}、長さ三四^{センチ}、厚さ一八^{センチ}の軽石製陰石を埋置し、同じく軽石製石蓋をかぶせ、更にその上を粘板岩の板石で覆っている。配石の周辺には四個の甕形土器を配し、そのうち北端の一個は、北九州から移入した丹塗研磨の須玖式甕形土器である。この土器は煮沸に用いた痕跡がなく、壺と同様に底部近くに穿孔が施されている。この他磨製石鏃・丹塗の軽石礫・穿孔された軽石なども配置されていた。

この遺構で、地元の土器（山ノ口式）と北九州の中期後葉の須玖式土器とが共存したことは、編年に重要な意義をもつものである。

本遺跡では、遺物の出土状況に極めて特異な様子が見られる。これは遺跡の性格を物語る一つの鍵ともなっている。その一つは、各遺物が一個体分ずつ一点に集中して出土するということである。普通に見られる、遺物の上下の移動や、平面的な移動がないのである。これは遺跡がある時点で凍結してタイムカプセルに入ったものと表現できよう。このような現象は、自然現象としては、火山の爆発による火砕流の襲来が考えられよう。

第二は、遺跡が形成された後、ある時点で火山（開聞

岳)の噴火があり、噴出した火山灰(コラ)が遺物の表面に固着している。この火山灰は紫色で粒子が細かでやや硬く、層は断続していて薄い。

第三は、遺跡が形成された時期に、遺物が地表面に露



第24図 山ノ口遺跡岩偶

呈していた部分と、土に被覆されていた部分とを比較すると、磨耗の度合に著しい差異がある。これは遺物の一部分が地表に露呈した状態で長期間を経過したことを示している。

以上の様な状況は、普通の遺跡ではほとんど見られないもので、この遺跡は構築されたままの状態で、地表において長期間を経過し、その間、人間や動物などによる毀損を受けることなく、開聞岳の噴火の頃を境として埋没したもので、遺跡形成時の状態を完全に残した稀な例である。恐らく、聖地としての対応があつたためであらう。

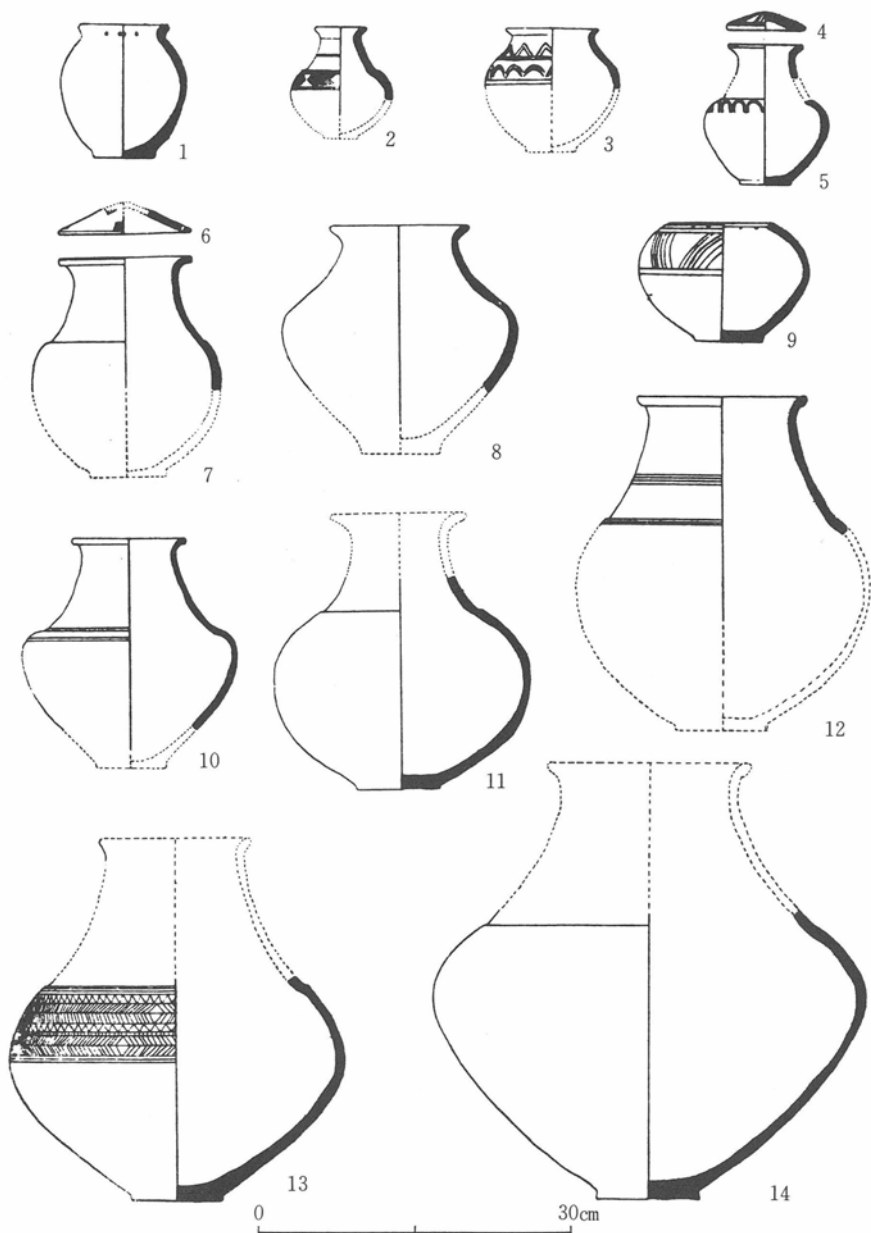
本遺跡を特徴づける遺物に、軽石製陰陽石・岩偶がある。これらは、いずれも遺跡の一部に立石のように立てたもので、基部は土中であつたことを示し、地上に露呈



第25図 山ノ口遺跡岩偶

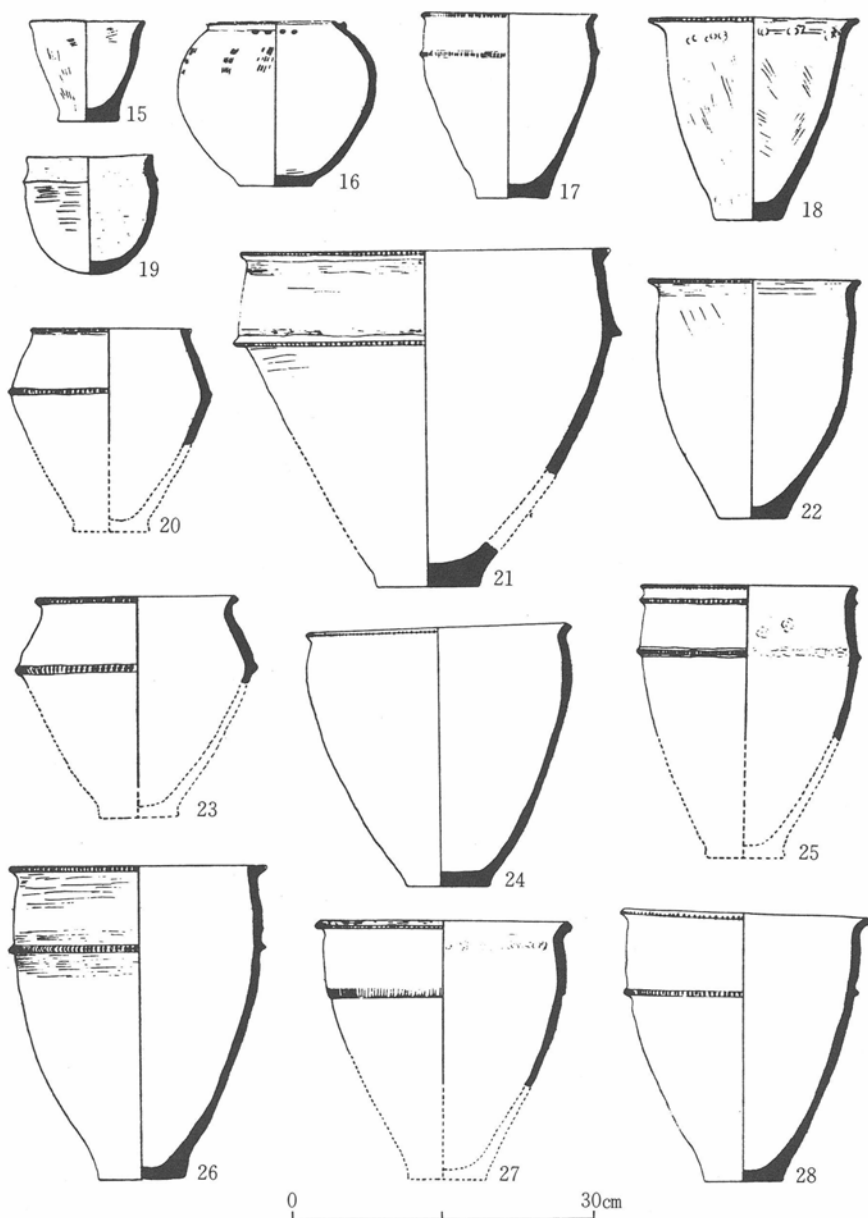
していた部分は風食を受けている。従つて、弥生中期中葉の incoming 遺跡から出土した軽石製岩偶が高さ一四センチと小さいのに対し、本遺跡では、男性岩偶は高さ三〇・五センチ、幅一七・二センチ、厚さ八・二センチあり、女性岩偶の場合も高さ二六・五センチ、幅一四・二センチ、厚さ八センチあつてはるかに大きい。軽石製石棒は更に大きく、長さ三九・五センチ、幅二二センチ、厚さ一一・五センチである。砂鉄採掘によつて出土したために、出土状況は不明であるが、軽石礫の環状配石に沿つて立てられたものであらう。

山ノ口遺跡出土の土器は、一の宮式土器と並行の時期で中期後葉に属し、山ノ口式と呼ばれる。南九州で弥生



第26図 高橋貝塚土器実測図

高橋Ⅰ式：2・7・9・10～14，高橋Ⅱ式：1～8



第27図 高橋貝塚土器実測図

高橋Ⅰ式：15・17・18・22・24・25・27・28

高橋Ⅱ式：20・21・23・26，夜臼式：16，縄文式：19

式土器が、一型式のみをセットとして一括出土したのは初めてである。これによって大隅式は一型式以上のものが包括されていることが判明し、型式として成立せず、以後はこの名称の使用は見られなくなった。

山ノ口遺跡の重視すべき意義は、南九州の弥生土器編年に唯一の基準を与えたことである。それは、陰石を伴う環状配石において、山ノ口式甕形土器と北九州から移入した須玖式の丹塗研磨された甕形土器とが共伴出土した事実によって、須玖式土器が北九州で中期後葉に位置づけられていることから、南九州でも同じ基準によって山ノ口式を中期後葉に位置づけ、山ノ口式を起点として南九州弥生土器の編年が形成されたことによるのである。

高橋貝塚

高橋貝塚は金峰町高橋の吹上砂丘内縁にあつて、玉手神社の境内になつている。昭和四十七年（一九七二）・昭和四十八年（一九七三）に河口貞徳らが二次に亘つて発掘調査を行った。

弥生土器の発生については、昭和二十六年（一九五二）の福岡県新宮町、夜臼遺跡^{やうす}発掘以前は、北九州と畿内との二元発生説が行われていた。しかし夜臼遺跡に続いて福岡市板付遺跡^{いたづけ}の発掘が行われ、縄文晩期の夜臼式

土器と共伴して、弥生最古の土器（板付Ⅰ式）が発見されるにおよんで、弥生土器の九州発生説が定着するに至った。

「弥生最古の土器（板付Ⅰ式）は、縄文式の伝統を強くもった土器（夜臼式）を伴出し、福岡県板付遺跡を標式として、福岡・長崎・熊本・宮崎・高知の各県に分布している。次の時期には分布が九州・中国・四国・近畿に広がり、更にその次の時期には愛知県にまで達している」（日本考古学辞典・一九六二年・東京堂）とあつて、昭和三十七年頃までは、南九州にあつては、最古の弥生土器の分布は知られておらず、昭和二十七年に発掘した東昌寺遺跡から出土した弥生土器は、前期には属するものの、最古のものではなかった。

南九州に弥生土器文化が伝播したのは、発生から一時期遅れた第二次の伝播であつたとする、昭和三十七年以來の通説を打破して、福岡・長崎・熊本・宮崎・高知の各県と同様に、鹿児島県への弥生土器文化の伝播は、発生と同時に第一次の伝播であつたことを証明したのが、高橋貝塚の発掘調査であつた。

高橋貝塚は、板付遺跡と全く同様の土器の共伴関係を示し、縄文晩期の夜臼式土器と弥生最古の高橋Ⅰ式（板付Ⅰ式該当）土器を共伴出土した外、大陸系・縄文系の

石器の組み合せもよく符合している。

このような板付遺跡との共通性をもつ反面、貝塚であつたために骨角牙器・獣魚骨・貝など通常の弥生遺跡では得にくい資料を多く出土し、また最も早い時期に南海産のゴホーラ・オオツタノハ貝を移入して貝輪を作り、鉄器を使用したことを示す資料を出土している。

高橋貝塚には五つの遺物包含層があり、第1層（表層）は攪乱層であるが、弥生中期の土器を主とし、成川式土器、須恵器、青瓷^{せいし}などを少量出土している。

第2層は弥生前期土器

第3・4・5層は弥生前期土器、夜臼式土器が出土している。

これらの土器は縄文土器と弥生土器に分かれ、弥生土器は更に四様式に分類される。

(1) 縄文系統土器

主体は夜臼式土器であるが、少量の夜臼式に属しないものを含む。

(2) 弥生土器

貝層より出土する土器は前期に属し、これを層序に従つて下層より出土するものを高橋Ⅰ式土器（板付Ⅰ式に該当）とし、上層より出土するものを高橋Ⅱ式土器（板付Ⅱ式に該当）とする（第26・27図）。

表層より出土する弥生土器は中期に属するが、このうち前葉と思われるものを高橋Ⅲ式とし、後葉と思われるものを高橋Ⅳ式とした（第26・27図）。高橋Ⅳ式は移入されたもので須玖式土器で、数量も少ない。

高橋貝塚では明瞭な層序をもつて、前期土器が出土し、この層序によつて高橋Ⅰ式・Ⅱ式が分類された。高橋Ⅰ式は、縄文晩期終末とされる夜臼式との共存関係が確認されたことによつて、最古の弥生土器であることが明らかになり、南九州における弥生土器の発生は、北九州のそれとほとんど差異のないことが判明した。

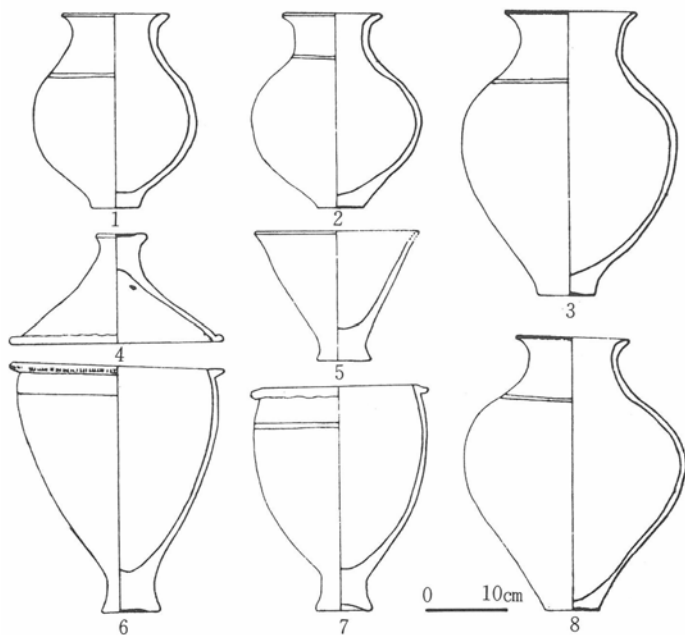
入来遺跡

入来遺跡は吹上町入来にある。昭和四十四年（一九六九）・昭和四十五年（一九七〇）・昭和五十一年（一九七六）に河口貞徳らが発掘調査を行い、弥生中期前葉のV字溝、U字溝、貯蔵穴、支石墓と、成川式終末期の住居址群が明らかになった。

山ノ口遺跡・高橋貝塚の調査によつて、南九州の弥生中期後葉と前期の様相は明らかになったが、中期前葉については、高橋貝塚から若干の資料は得られたものの、攪乱層からの出土であつたために不明瞭なところがあつた。

入来遺跡はこの空白部分を充填するものであつた。入

第28図 入来遺跡の土器

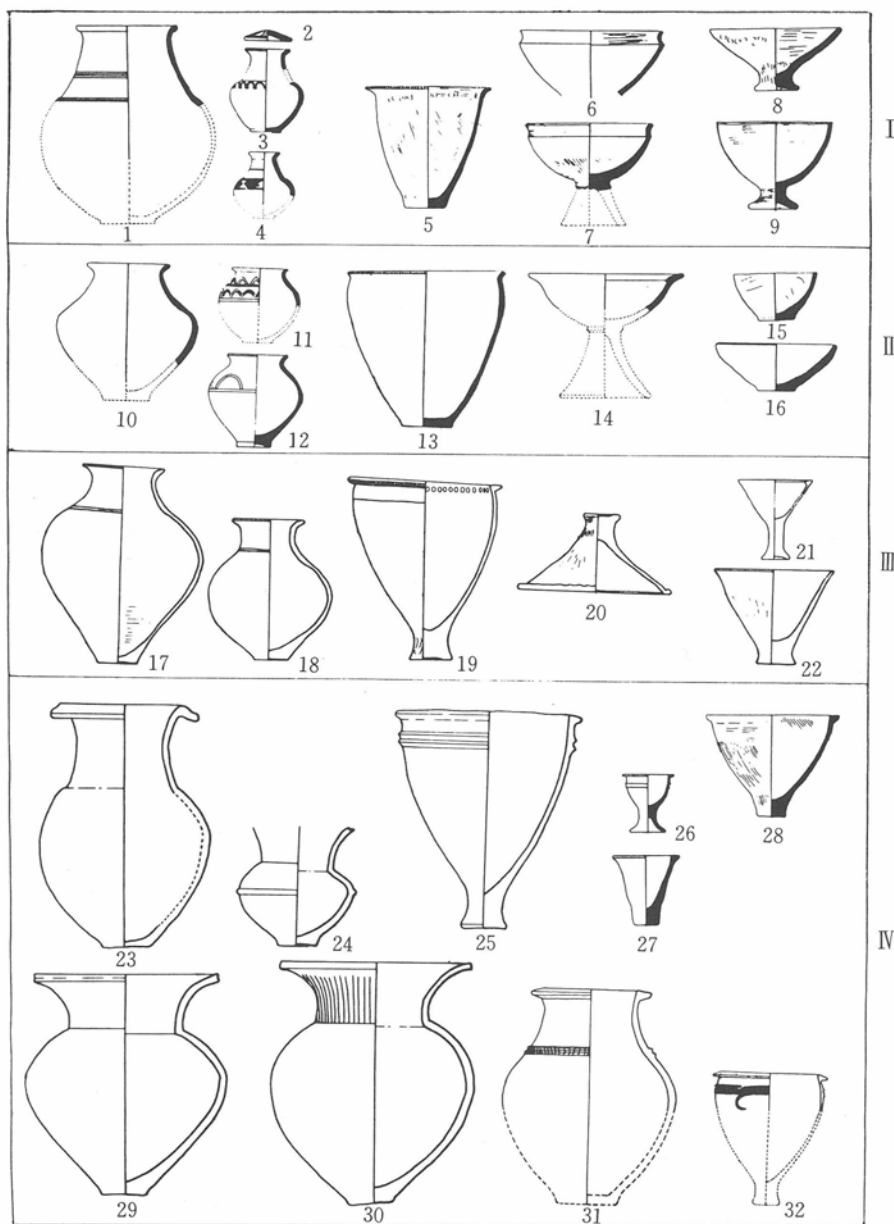


来遺跡出土の土器は「入来式」と命名され、中期初頭に位置づけられた。この土器は、前期の甕形土器に見られる頸部と胴部の境の沈線と同趣のものを、甕形土器の頸と胴部の境と、甕形土器の口縁下に施したもので、この他に甕形土器には、縄文式の影響である刻目凸帯をめぐらすものもある。この型式は北九州との関連が強く、福岡県亀ノ甲遺跡、熊本県西原遺跡に類形が見られるが、入来遺跡では甕形土器の底部が肥厚して脚台となっているのが特徴である。この甕形土器の器形は高橋Ⅲ式などを経て山ノ口式、一の宮式などへ伝わり広く南九州に分布するに至っている(第28図)。

松木藺遺跡

松木藺は金峰町^{おくだり}尾下字松木藺にある。昭和五十三年(一九七八)以降、本田道輝が発掘調査を行っている。従来は成川式土器が、弥生後期にあてられていたが、前に述べたように、成川式は古墳時代に下るものであることが判明したために、南九州の弥生後期に該当する土器文化は、中津野式のみとなり、中期の山ノ口式と後期末の中津野式との間に継続性が認められず、後期の前葉から中葉へかけて散発的な資料が見られるだけで、まったく資料を出土する遺跡の発見がなかった。

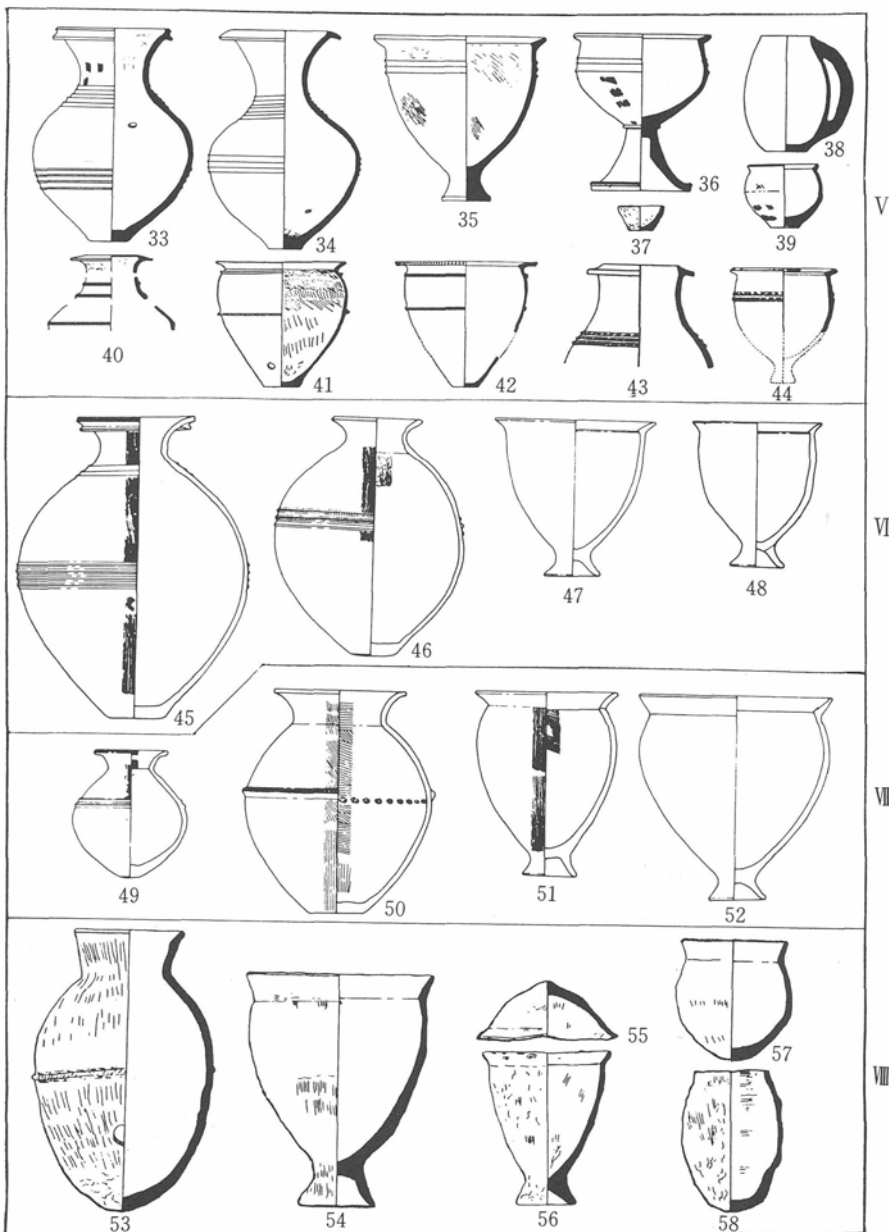
松木藺遺跡は丁度、この空白部分を充填するのに適当



第29図 南九州弥生土器集成 I

(高橋：1～11・13～16，口輪野：12，入来：17～22，

吉ヶ崎23～25・29・30，山ノ口：26～28，入来31・32)



第30図 南九州弥生土器集成Ⅱ

(山ノ口：33～39，成川40～42，1の宮43・44，松木藺45～52，中津野53～58)

な土器を、一括して出土したのである。

松木藺遺跡のV字溝から出土した土器は、二つの様式に分けられ、その一つは南九州弥生土器集成Ⅱの第Ⅵ様式（後期前葉）で、他の一つは第Ⅶ様式（後期中葉）である。

第Ⅵ様式は山ノ口式よりの移行の様子がよくわかる。壺形土器は小さな平底を有し、頸部と胴部に三角凸帯をめぐらすもの、胴部のみに凸帯をめぐらし一部の凸帯に刻目を施すものなどがある。口縁部では、山ノ口式の特徴である端部が屈曲して外へ傾斜する形が消失して、単に外反するだけになるが、一部には口縁部が二またに分かれる特徴を、そのまま残すものもある。甕形土器は中空の上げ底器台となるが、わりに低い。口縁内面に稜線を有し、外反して広い平坦面を形成する。

第Ⅶ様式土器にあつては、壺形土器はなお小さな平底であるが、胴部に一―二条の三角凸帯をめぐらし、口縁部は外反する。甕形土器は中空の上げ底器台が定形化し、口縁部内側には稜線を形成して外反する。

中津野遺跡

中津野遺跡は金峰町にある。昭和二十五年（一九五〇）に河口貞徳が発掘調査を行った。二段に掘り込まれた堅穴が発見され、中央の凹所から、壺・甕・蓋・高杯

・手捏小形土器などの完形土器が四十個以上出土した。本遺跡から出土した土器は、一様式に属し、南九州弥生式土器集成Ⅱの第Ⅷ様式（後期後葉）に当たる。壺形土器は丸底となり、胴部に刻目凸帯を一条めぐらすものと、凸帯のないものがある。甕形土器は中空の器台をつけ、口縁部外反の角度は弱くなるが、なお口縁部内面の稜線は残る。甕および壺用の浅い蓋形土器が見られる。

吉ヶ崎遺跡

吉ヶ崎遺跡は串良町にある。昭和五十二年（一九七七）鹿児島県文化課が確認調査を行った。火災にあつた堅穴住居址から、一括遺物が出土した。中期中葉に属し、南九州弥生土器集成Ⅰの第Ⅳ様式に当たる。なお第Ⅳ様式の図には吉ヶ崎出土土器の他に、同じ時期と思われる山ノ口・入来の両遺跡の土器も加えてある。

第Ⅳ様式の時期は、地域的な特徴が定着すると同時に、移入土器と考えられるものが共存するようになる。壺形土器では23・24は地域的特色のよくあらわれたもので、29・30は北九州系統のものである。31は一の宮式の先行型式で薩摩半島に分布するものである。甕形土器は、充実した器台を有することは、前様式と同様であるが、底部は平坦で上げ底になることはない。口縁部は逆

第31図 大隅の古墳群



L字状を呈するのが特徴である。
 南九州弥生土器集成は、以上に挙げた各遺跡出土の土器を資料として、南九州における弥生土器文化の編年を行ったもので、八つの様式に分類した。第Ⅰ・Ⅱ様式は弥生前期、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ様式は弥生中期、第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ様式は弥生後期に該当する。

第四節 古墳時代

畿内に発生した古墳文化が南九州に伝播したのは、五世紀の中頃とされている。畿内型古墳の分布は、東側の大隅半島の志布志湾沿岸と肝付川流域及び、西側では長島と阿久根市の脇本に限られている。

南九州では、これらの畿内型古墳の他に、地域的特色の強い地下式横穴・地下式板石積石室・立石墓などの葬制がそれぞれの地域に分布している。

県内で主要な古墳地帯となつている大隅地域を見ると、志布志湾沿岸では、北端のダグリ岬に、自然の地形を利用した古い形の飯盛山古墳（現在は国民宿舍敷地）がある。全長八〇メートル、表面に葺石があり、後円部には堅穴石室があった。ガラス製の勾玉・丸玉と壺形埴輪が採集されている。年代は五世紀中葉と推定され、本県で最も古い古墳である。

肝属平野の中央を流れる菱田川流域には、有明町野神（山神ノ上）・原田（大塚△）の古墳群と蓬原の地下式横穴群があり、その南の田原川の流域には、大崎町飯隈・神領・竜相・横瀬などの古墳群が南北に並び、その西南方には鷺塚地下式横穴群が見られる。

横瀬の前方後円墳は全長一三・一^{メートル}、高さ一五・一^{メートル}、昭和五十二年（一九七七）に県文化課が行った調査によって、幅一〇・二^{メートル}・三^{メートル}の周濠をめぐらしていることが判明した。後円部には堅穴石室がある。円筒形埴輪・象形埴輪・楕形埴輪片・須恵器などが出土した。水田面から崛起して形が優美で本県随一の美しい古墳である。昭和十八年に文化財に指定された。五世紀末の築造である。

神領天子丘古墳は全長四〇^{メートル}の前方後円墳で、後円部に箱式石棺がある。副葬品として石棺内に日光鏡と獸帯鏡が各一面、棺の両側にそれぞれ剣と刀が出土している。日光鏡は「見日之光長母相忘」の銘があり、前漢〜後漢初の様式であるが、宋代の再版鏡とされている。

五世紀末の築造であろう。

肝付川流域には、東串良町に、北より大塚原古墳群（一〇基、内一基は地下式横穴）、岡崎古墳群（一五基）、上小原古墳群（一五基、内一基は前方後円墳）、などがあり、河口に近い唐仁古墳群は総数一二四基（内六基は前

方後円墳、指定時は総数一三三基、うち一号の大塚は本県最大の柄鏡式前方後円墳で、全長二三・〇^{メートル}、高さ一〇・九^{メートル}、後円部は周濠をめぐらしている。後円部は削平して大塚神社を建て、渡り廊下の下に堅穴石室の蓋石五個が露出している。石室内には長持形石棺が納められ、その端に近く短甲が置かれていたといわれている。

他に拝殿の下に組合せ石棺が露出し、石蓋は除かれ、内部に石枕が残存している。凝灰岩製の、上面にくぼみをつけたのみの粗末なものである。西日本に多く、後期まで続く型式である。渡り廊下の下に長持形石棺は古い型式であり、短甲を伴っている点などを考慮すると五世紀後半に位置するものである。拝殿下の組合せ石棺はやや時代が下り、後の寄生墳であろう。唐仁古墳群は昭和九年に、文化財として国の指定を受けた。

肝属平野の南縁には、高山町の塚崎古墳群四四基（内前方後円墳四基）がある。昭和二十年に国の文化財に指定された。この付近には辺塚古墳群一五基（内地下式横穴三基）、宮ノ上古墳群（地下式横穴五基）、辻古墳群（七基）、軍原古墳群（二〇基）、上西方古墳群（五基）、西横間古墳群（八基）、丸岡古墳群（七基）、北後田古墳群（四基）などの小古墳群が密集し、その間に地下式横穴もまぎって一大古墳地帯を形成している。

第32図 長島の古墳群
(牛ノ浜 修による)



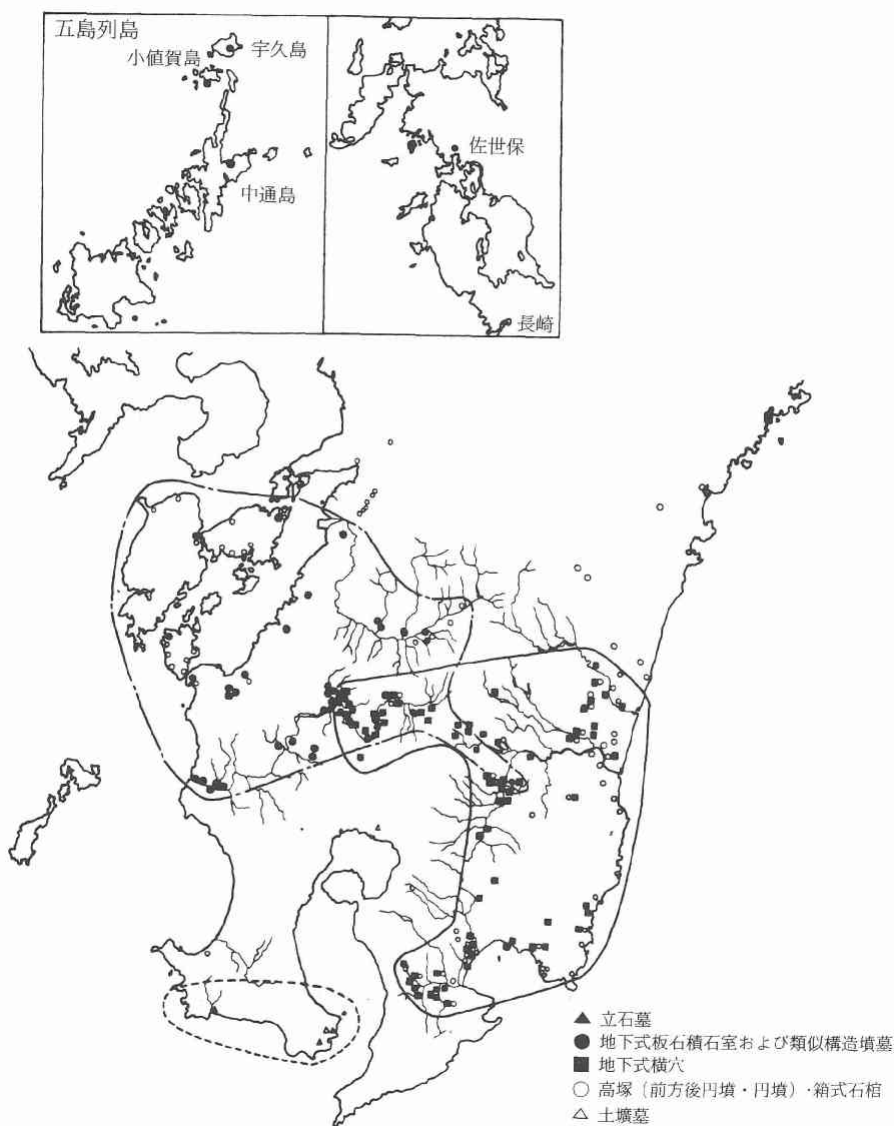
西側の古墳分布は大隅地域ほど濃密ではないが、阿久根市脇本古墳群では、横穴式石室をもつ高塚古墳二基の他、地下式板石室一基、組合石棺三基が発見されてい

る。

長島の古墳は封土のかわりに礫を盛った積石塚である。東岸の加世堂古墳など一、二を除けば、大半は西海岸に集中している。西岸では北より温之浦古墳群、明神下岡古墳群、明神古墳群、白金崎・鬼塚・楽之平古墳、小浜崎1・2号墳、指江古墳群などがある。このうち指江古墳群と明神古墳群は同一型式で、礫浜に堅穴石室を設けたもので、封土状に礫を盛っている。明神下岡古墳は、昭和五十九年（一九八四）調査されたもので、組合せ石室に蓋石をかぶせ、更にその上を板石で葺いたものである。二六号墳では葺石と蓋石の間から弥生中期の山ノ口式土器、石室内からも数片の弥生土器片を出土している。地下式板石積石室系統のものと考えられ、極めて重要な意味をもつ遺跡である。

小浜崎にある小浜崎1・2号墳、白金崎・鬼塚古墳は一連のもので、小浜崎1号墳は小口積の堅穴石室、2号墳は石棺系の石室を有し、白金崎・鬼塚の両古墳は横穴式石室をもつ積石塚である。このうち白金崎古墳は副葬品が多く、須恵器・鉄鏃2・刀子1・金祖2・金銅製刀装具残片・金銅製責金具2・金環11・銀環1・勾玉7・管玉4・東玉2・切子玉8・そろばん玉7・小玉94・丸玉2が出土している（盗掘後の残存遺物、これらの副葬

第33図 南九州の古墳分布図（上村俊雄・本田道輝による）



品は黎明館に陳列)。金銅製刀装具は儀式刀の残片であり、畿内勢力との関係を示すもので、古墳の性格を推定するための資料とされている。

温之浦古墳群は五基発見されており、いずれも横穴石室を有する積石塚である。

地下式横穴

地下式横穴は、宮崎県中南部より、鹿児島県北東および南東部へかけて分布する、独特の古墳時代埋葬である。地表から二、三メートルの豎壙を掘り、横に掘り進んで、羨道せんどうと玄室を設けるもので、玄室の形と羨道の位置によって、二種類に分けられる。Ⅰは、玄室の平面形が長方形で、天井部が寄棟、あるいは切妻の屋根形をつくるもので、羨道が玄室の短片に取りつけられたもの、すなわち妻入となるものである。Ⅱは玄室の平面形が楕円形で、天井部はドーム状の屋根形をつくり、羨道が長辺に取りつけられたもの、すなわち平入となるものである。Ⅰは古い型式であり、Ⅱは新しく、両者の中間形態を示すものもある。

玄室には粘土床、礫床などがあり、肝属平野では、Ⅰのタイプに軽石製組合せ石棺(第34図)を納入したものが多く見られる。羨道の入口は、礫・粘土塊・板・板石などを用いて閉塞し、豎壙は土を埋めて、地表には標



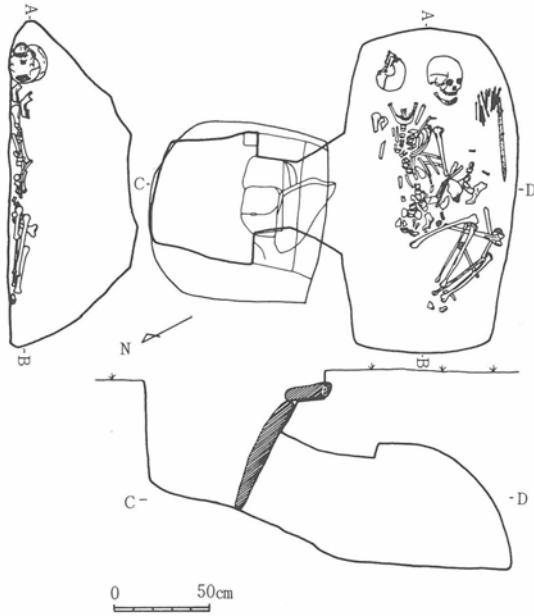
第34図 地下式横の組合せ石棺 (高山町前田)

識を残さないものが多い。しかし古式で規模の大きいものには封土を有するものがしばしば見られ、円墳となつている。

また、前にあげた二種類の型式の外に、内陸部の大口盆地では、まれに玄室が失われて、豎壙に直接埋葬したのが見られるが、最も時代の下るものと思われる。

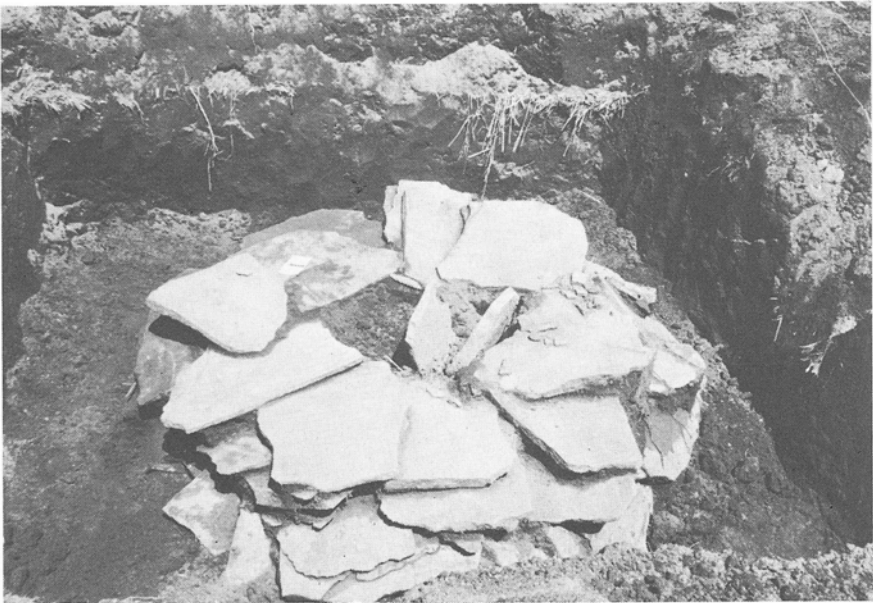
地下式横穴は、平野に接する眺望のよい台

第35図 地下式横穴（北方1号）



地に立地し、群集して設けられているが、特に時代が下るほど、この傾向が強い。宮崎県では一ツ瀬川以南に分布し、多くは高塚古墳群と共存するが、西諸県郡・都城盆地などの内陸部では、ほとんど単独に分布し、総数約四〇〇基を数える。

鹿児島県では、志布志湾沿岸の高塚古墳地帯に共存す



第36図 地下式板石積石室（別府1号墳）

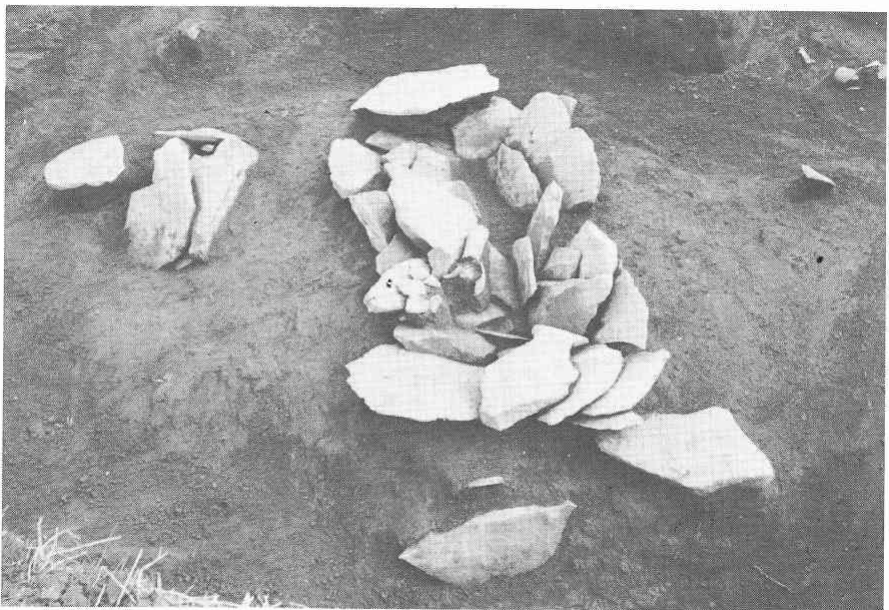
るほか、内陸部の大口盆地羽月川以東の大口・菱刈・栗野・吉松・横川などは単独に分布し、総数一五〇基に及んでいる。

地下式横穴は畿内型古墳文化の影響を受けて発生したもので、まず沿海平野地帯の畿内型古墳群分布地域、とくに宮崎県中南部に出現し、ここより漸次、内陸地帯へ波及していったと考えられる。その分布状況がそのことを証明している。

地下式板石積石室

地下式板石積石室は、鹿児島県北部から熊本県南部に分布し、一部は宮崎県大淀川上流域に及ぶもので、古墳時代における、この地域独特の埋葬法である。その起源は弥生時代^{おの}にあり、地下式横穴とは自ずから系統を異にするものである。構造は地表下一・五^{メートル}前後の深さに、安山岩または砂岩の板石を植えこんで、高さ四〇^{センチメートル}前後の槨壁をもつ石室を造り、床面に遺体を納めて埋土で被覆しつつ土を盛り、石室の上縁以上に板石を屋根を葺くように積み重ねて天井部を構成する。封土をもたないのが大半であるが、まれに小封土を有するものがある。しかし構築の際の排土を積んだ程度で、高塚古墳とは本来異なるものである。

石室内部は、畿内型古墳の石室のように空洞を想定し



第37図 地下式板石積石室の祖形 (堂前17号)

易いが、実は埋土が充填しているのが大部分で、極めて稀に大口市大住の第二三号石室のように内部が空洞となったものもある。川内市横岡の第四号石室では追葬が行われているが、これなどは追葬に便利のように、石室内部を空洞とした構造であつたかもしれない。一般的な地下式板石積石室の構造は、板石を持ち送り式に積み上げたものではなく、埋土の上に板石を葺き重ねたもので、葺石は埋土によつて支えられているのである。薩摩町別府原の第一号石室などでは、副葬品が埋土中から、上下に段差をもつて出土していて、石室内に埋土しながら板石を葺いたことを示している。

石室はその平面形に種々あるが、長方形・方形などの方形型と、円形・楕円形などの円形型が基本的な形で、その中間に位置するものもある。一般に方形石室は臨海地域に多く、天草・長島の島嶼や、出水平野・川内川下流域に分布し、円形石室は内陸部に多く、肥後の人吉盆地、北薩地方、宮崎県大淀川上流地域の他、特例的であるが肥後の芦北海岸地方にも見られる。細かく見ると、高尾野町堂前のように、方形石室群の中に円形石室が混じる遺跡や、吉松町永山遺跡のように、円形石室群の中に方形石室が混じる例も見られる。いずれにしても群集して設置されるのが特徴である。

副葬品は古墳と同様に、鉄製の剣・刀・鏃の他甲冑・鐔・鐙・轡や・金環・銀環・銅鏡・ガラス製玉・土師器・須恵器などを出土するが量は少なく、副葬品を欠く石室も多い。特に内陸部になるほどその傾向が著しい。

地下式板石積石室の発生については、共伴遺物・副葬品などから見て円形石室は四世紀までさかのぼるが、方形石室は六世紀中葉以降の所産であるとして、円形石室が先行するとする説があり、その後出水郡高尾野町堂前の一七号墓は長方形土壙に板石を葺き、その中央に古式の免田式の長頸壺が供献されていたことから、これを地下式板石積石室の祖形と考え、これより導き出される方形石室を、円形石室より先行するとする説が現われた。つづいて、昭和五十九年（一九八四）四月、県文化課戸崎勝洋・牛ノ浜修による出水郡長島町明神下岡遺跡の調査によつて、今までに見ない、特色をもつた地下式板石積石室の一群が発見された。板石で囲つた長方形の石室を蓋石で覆い、更にその上を板石で屋根状に葺いたものである。石室数三〇基のうち一〇基が調査されたが、その中、特に注目されるのは第一二号石室である。その構造は、前述と同様に石室を蓋石で覆い、その上を板石で葺いた後、更にその上に偏平な大石をのせるという特殊なものである。

未調査の石室のうち第九号・第一〇号・第一三号石室も同様の遺構と推定されている。これらの遺構は支石墓と関連の深いものと考えられる。

副葬品には土師器、須恵器、鉄剣の他、弥生土器の出土も見られ、須恵器・鉄剣は、大型で一部に小口積を用いた石室に出土し、土師器・弥生土器は小型の石室に出土しているが、一般には無遺物の石室が多い。弥生土器は中期後葉の山ノ口式甕型土器片で、第二六号石室の蓋石下で石室の外に出土した。なお同石室の内部からも弥生土器数片が出土している。

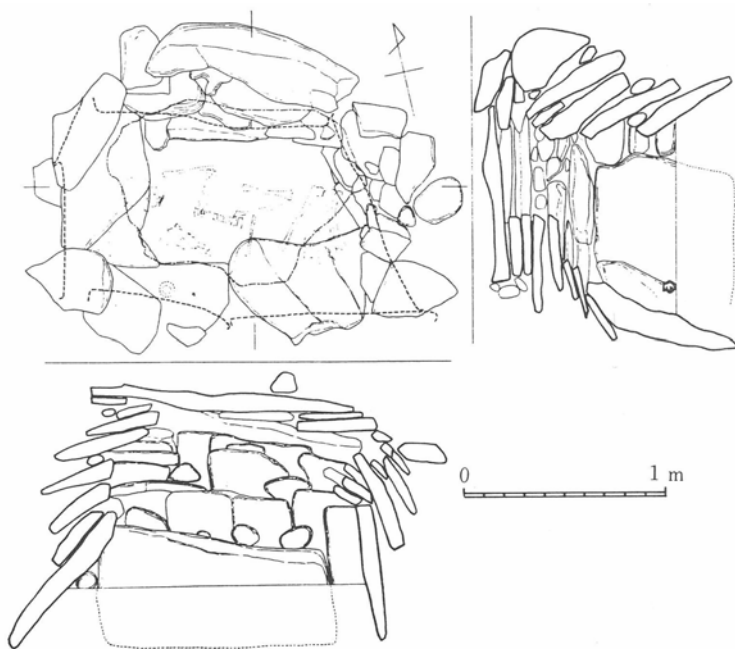
昭和五十九年（一九八四）十二月には、長島町東隣の東町小向江で、道路工事によって明神下岡と同型式の石室群が発見され、この様な埋葬法がこの地域に定着していたことを示している。

乙益重隆は、地下式板石積石室の源流について、熊本県球摩郡免田町吉井の通称市房隠で出土した第一号墓をあげている。小形の箱式石棺を蓋石で覆い、さらにその上に偏平な大石をのせたもので、これを免田Ⅰ式に伴う小形支石墓であるとし、地下式板石積石室の起源とする見解を示したことは注目される。

五島列島の弥生文化（小田富士雄）によると、長崎県五島列島中通島浜郷遺跡第二次調査における一号石棺

第38図 浜郷遺跡（第2次）

1号石棺（五島列島の弥生文化より）



と、同宇久島松原遺跡における二号石棺の構造は、長方形に板石を組み合せた箱形の石室の上に、板石を平積みして数段重ね、次第に空間を小さくするように積み、一枚石で最後に蓋をするもので、埋葬時にすでに棺内に砂を充滿している。「一見、南九州の古墳時代にみられる地下式板石積石室古墳が想起されるほどである。」と述べているが、正に地下式板石積石室そのものである。浜郷一号石室は壮年男女が仰臥屈葬され、うち女性は集骨状態であった。碧玉管玉³²、壺（城ノ越）、イノシシ下顎骨⁸、アワビ²が副葬された弥生中期前葉の埋葬墓である。松原二号石室は小児人骨を出土し、周辺に須玖Ⅱ式土器を出土することから弥生中期後葉の埋葬墓と考えられている。

地下式板石積石室の起源について重要な示唆を与えるものに、朝鮮半島南部および九州の西北部に分布する支石墓がある。この地域のもは東北および北部朝鮮に分布する巨大な卓子形と異なり、漢江流域以南にみられる基盤形と呼ばれるもので、巨大な撐石の下に数個の支石をおくものである。その下には石室を設けて遺骸を納めるが、石室は、積石でつまれるものが多い。九州でも十力所以上の支石墓群があり、主体部は甕棺、石棺の他土壙も見られる。建造の年代は縄文晩期から弥生後期に

及んでいる。

明神下岡遺跡の一二号石室は、前述の支石墓に類するもので、支石を欠くが、石室をつつむ積石から転化したと考えられる葺石によって石室が覆われ、その構造は支石墓とよく一致すると共に、地下式板石積石室の要素も備え、両者の中間的位置にあつて移行形態を示すものと考えられる。

以上に述べたように地下式板石積石室の起源に関する資料は次第に蓄積されてきているが、それらによると、この墓制が最初に出現したのは、九州西海岸の島嶼地帯で、発生の時期は弥生中期である。弥生後期にいたつて本土へ伝播し、熊本県南部から川内川流域に分布を広げ、五世紀代になると畿内系高塚古墳文化の影響を受け、七世紀代まで継続した。その源流は、明神下岡の一二号石室などに見られるように、基盤形の支石墓にあるものと見られ、その本流は、石室を積石でつつむタイプから発生したものと考えられる。長方形の土壙に板石を葺いた堂前の一七号墓・菱刈町前畑の一・二号墓や、小形箱式石棺に偏平な大石をのせた市房隠の第一号墓は、いずれもこの墓制に関連の深いもので、支石墓から地下式板石積石室が発生する過程で、派生的に生じた現象と考えられる。

この墓制の特徴は主体部をなす石室の形態によく現われている。発生の初期（弥生中期）は五島の浜郷・松原や長島の明神下岡遺跡に見られるように主体部は長方形石室であり、続く弥生後期にあっても、菱刈町前畑の二二号石室（弥生後期）は、長方形石室が継続して行われていることを示している。その後、石室の上面をそろえるために、構築法に小口積の技法を取り入れ、あるいは石室の上面を不揃いのまま葺石するなどの変化を経て、終末期まで、長方形石室の形態は、主として海岸地帯に行われている。

この墓制が行われるようになって、弥生期を過ぎた後に、一部の海岸地帯から内陸地帯へかけて、主体部が円形または楕円形石室をなすものが現われる。この種のが初めて出現するのは、大口市大住の一号石室や吉松町永山の一〇号石室によって示される成川式土器の時期で、それ以前にさかのぼるものは、今のところ発見されていない。堂前の五号石室や初野の三号石室は、長方形石室の両側をふくりました形であり、長方形石室から円形石室への移行形と考えられ、新深田の円形石室には、長方形石室に見られる、石材を横に使用する方法が一部に用いられており、両者の関連を示している。従って円形石室は、成川式土器の行われた頃に、長方形石室から

派生して、内陸地帯に主として行われたものと見られる。

立石土墳墓

この墓制が判明したのは、昭和三十二年以来四次にわたって行われた、揖宿郡山川町成川遺跡の発掘調査によるものである。成川遺跡は舌状丘陵の南斜面に形成された広さ一・五^坪余りの集団墓地で、確認された人骨四二二体、陪葬された土器は一千個以上に及び、鉄器は約三百点以上を出土している。埋葬遺構は開聞岳の噴火による火山灰の堆積によって埋没しているが、この遺跡の大きな特徴となっている立石は、山麓の最も傾斜の緩やかな面に点々と立てられている。材質は輝石安山岩で成川盆地の東縁部で産出される。立石の数は三〇に近く、板状または柱状の石材を用い、基部を埋めて、当時は地表上に一対前後を露呈していたが、現在は倒れたり、中程から折れたり、あるいは数個体に破損したものもある。立石の埋設は、平坦面が南北に向くよう工夫されているが、これによって立石の面は等高線に平行になり、下方から見上げると立石の広い面が正面に見られることになる。

立石は埋葬の標識と考えられているが、調査の結果は特定の人骨、または人骨群と結びつくものではないと判

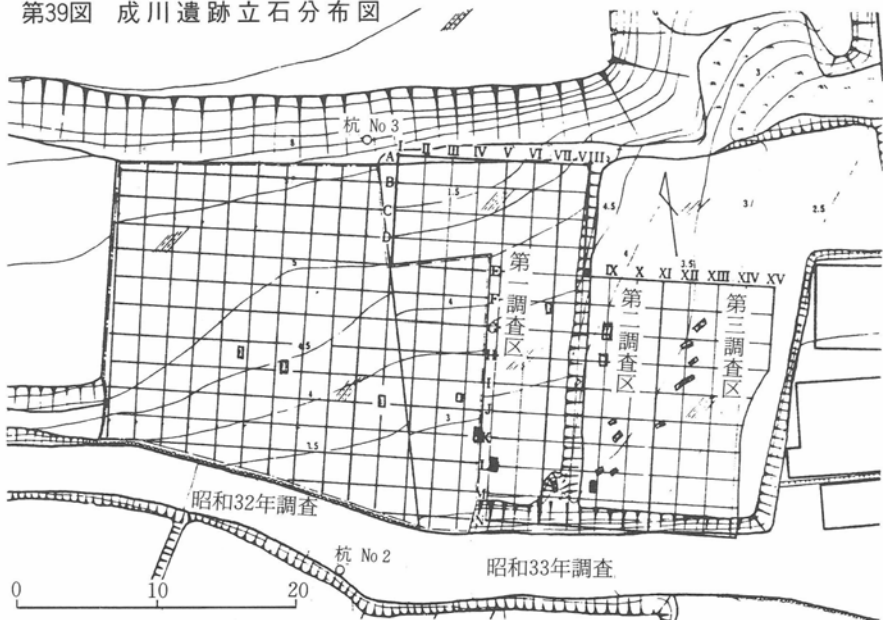
断されている。しかし立石のあるものは、基部が酸化鉄で塗彩されていたりして、きわめて儀礼的な性格をもつものであることは否めない。第二次調査における第二調査区の中央部分には、空白地帯があり、ここに巨大な立石があり、その基部にきわめて長期間にわたる焚火の跡が残されている。この巨大な立石は、ある特定の人骨・人骨群の墓標といったものではなく、この墓地を営んだ集団全体の喪葬儀式の一翼をになうものと考えられている。

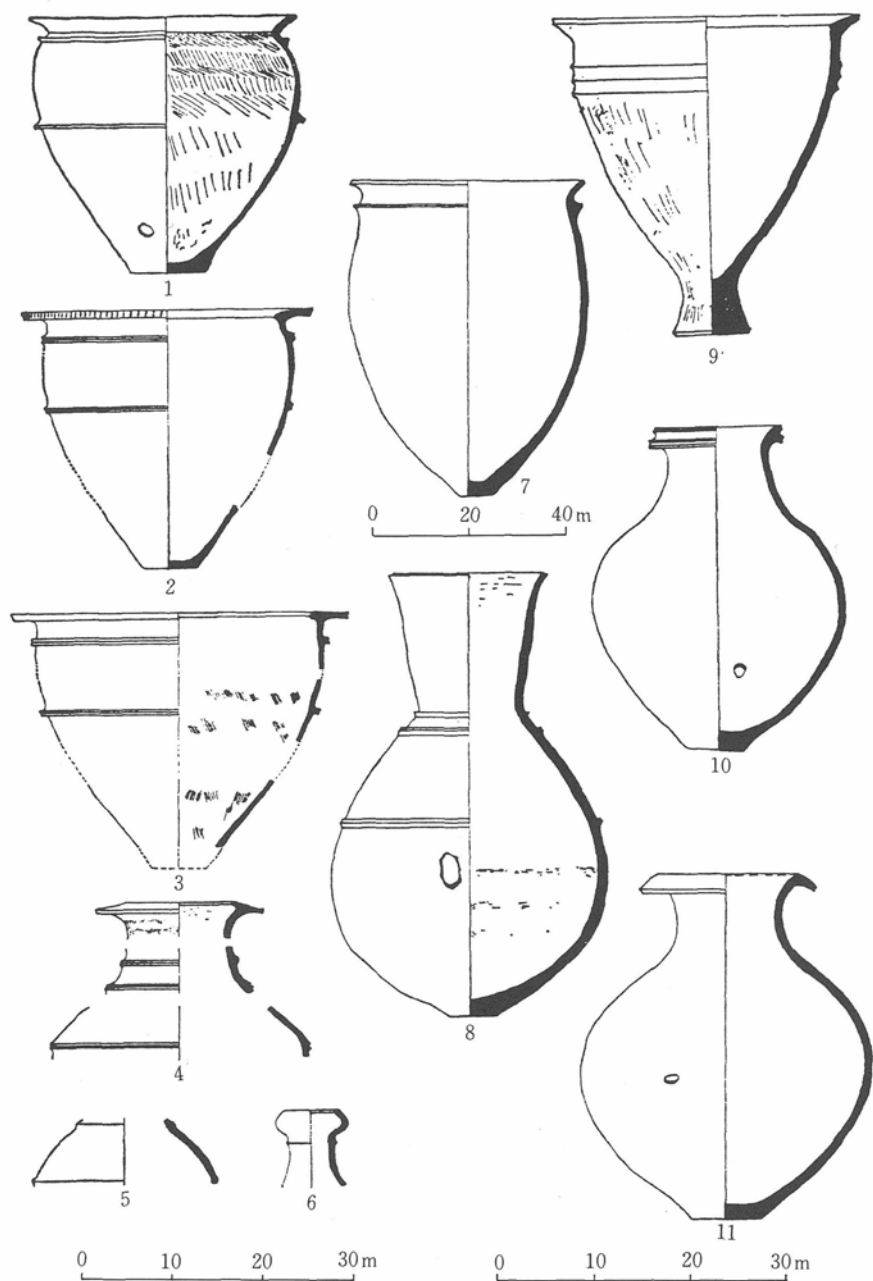
埋葬

埋葬は、ほとんど等高線に沿って、すなわち東西方向に行われていた。これは傾斜面の効果的利用法がとられたものと考えられている。遺体の埋葬には、掘り込みが作られた筈であるが、中腹以下の緩傾斜面では、明らかに墓壇の認められたものは二例にすぎない。これとは対照的に、いくぶん傾斜した中腹以上では一四一例が確認されている。墓壇は等高線に沿って長楕円形に作られ長径一・七メートル、幅〇・五メートル内外、深さ〇・一五メートル内外である。これらの素掘りの土壇以外に一個の甕棺をのぞいてなんらの棺・槨施設は認められなかった。

遺体には、仰臥伸屈葬のものと仰臥立膝葬のものがあり、東頭位と西頭位の別が見られるが若干西頭位が多

第39図 成川遺跡立石分布図





第40図 成川遺跡出土の弥生中期・後期の土器

1～6：須玖式

7・8：弥生後期土器

9・10：山ノ口式

い。人骨は遺跡のほとんど全面から発見されていて、何らかの群別は認められないが、後時の埋葬のとき、前の埋葬骨を攪乱した形跡がしばしば認められ、土壙にも切り合いがあり、長期にわたって継続的に埋葬が行われたことを示している。

人骨の保存状態はきわめて悪く、発掘のかたわらから碎けて粉になり、計測は現地で行う他はなかった。従ってすでに消滅したのも多く、中腹以上に発見された墓壙一四一基のうち人骨の確認できたものは一一五体で、埋葬人骨の一八割強が消滅したことになる。調査によって確認された人骨数は四二二体で、昭和三十二年の採土工事によつて遺棄された人骨数は、工事面積から算出して一六八体となり、成川遺跡出土の人骨実数は五九〇体、埋葬後に消滅した数を推計加算すると、当初に埋葬された総数は六九八体であった。

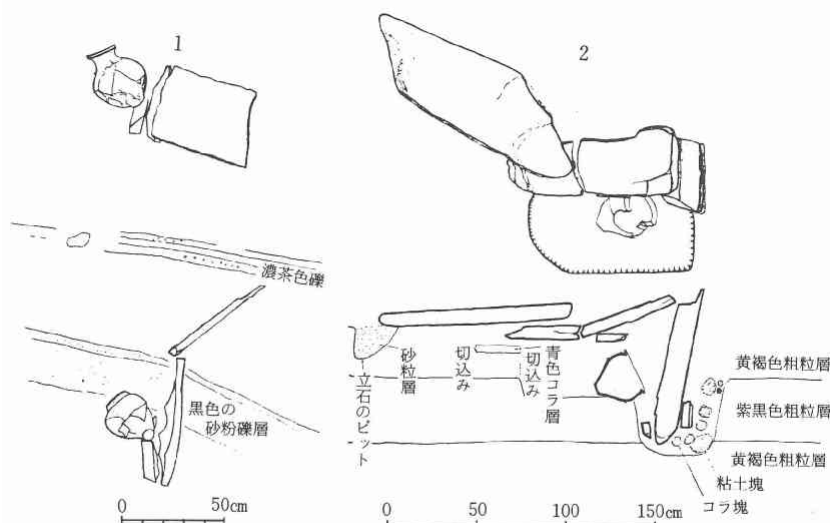
遺跡の年代

成川遺跡が墓地として成立し存続した年代と、墓地以前の性格などについて知るためには、出土した土器・鉄器の他立石などの様相、周辺の遺跡との関係などについて考察する必要があるが、まず最も有力な手がかりになる土器について述べよう。

土器は弥生中期後葉・後期および古墳期に属するもの

である。弥生中期後葉の土器には、北九州方面から移入された須玖式土器と、在地の山ノ口式土器があり、須玖式土器は甕形土器三個、壺形土器三個ありいずれも丹塗研磨され、甕形土器のうち一個は完形で、立石に共伴出土した。山ノ口式土器は、甕形土器六個、壺形土器四個あり、それぞれ二個ずつが完形品で、壺形土器の一個は立石に共伴するものであった。成川遺跡の埋葬地域南縁は町道曲道線によつて断ち切られているが、この道路に沿つて墓域のうち中央線より東の幅一二メートル、奥行八メートルおよそ百平方メートルの地域が、弥生中期後葉の山ノ口式と須玖式土器を出土する地域で、ここからは磨製石鏃も出土し、東西両端には、中期土器を伴う立石が配置され、他地域とおもむきの異なる一面を形成している。山ノ口式と須玖式とは共伴関係があり同時期であるからこの地域は須玖式土器を移入した山ノ口式の人々によつて作られた遺構と考えられる（第40図）。

従来、成川遺跡は弥生中期に始まった埋葬遺跡と考えられてきたが、この地域（弥生中期後葉土器の出土する）でも四十数体の人骨が出土したにもかかわらず、中期の弥生土器を伴った人骨は一例も発見されていない。従つて成川遺跡を弥生中期以降の埋葬址とする証拠はな



第41図 弥生中期の立石（成川遺跡）

弥生後期の土器には甕棺（第40図7）と長頸壺（第40図8）がある。甕棺は口径五一センチ、高さ七四センチで、昭和三十二年の第一次の調査で、遺跡の西端から約九メートル、町道曲道から八メートルの地点から、横位西向きで出土した。三津式の系統を引くもので、弥生後期前葉期のものと思われる。同様の甕棺の大片が他に一個出土している。

長頸壺形土器は昭和三十三年の第二次調査で、第一次調査区から出土した。町道曲道から一六メートル、甕棺からは二〇メートル東の地点である。頸部下端と胸部に口唇状の凸帯をめぐらすもので、弥生後期後葉期のものと思われる。

弥生後期の資料はわずかに三点にすぎず、遺跡としてはきわめて小規模なものであるが、この時期に埋葬が行われたことは確実で、成川遺跡において埋葬が行われるようになったのはこの時期からであろう。

古墳期の土器は成川式土器とこれに共伴する土師器と須恵器である。成川式土器は成川遺跡出土土器の大部分を占めるもので、従来薩隅式・薩摩式などの名称があり、壺形・鉢形・高坏形の器形が見られ、他にきわめて少量の甕形土器がある。その割合を見ると壺形土器四割、高坏形土器三割、鉢形土器二割、甕形土器三割で、壺形土器が最も多く、甕形土器の占める割合は極端

に少なく、皆無にひとしい。

成川式には大まかに分けて松之尾タイプ、笹貫タイプ、入来タイプがあると思われるが、成川遺跡では入来タイプを欠き、年代は四世紀より六世紀前葉に至る間におさまるものと思われる。

土器は人骨より上層から出土しており、特定の人骨と結びつくような配置はほとんど発見されていない。第一次・第二次調査では墓墳の発見例は少ないが、埋葬時には土壇を設けて埋葬したものと思われ、構築されていた土壇が地層の状況によって検出できなかったためと思われる。また土器・鉄器が特定の人骨と結びつかないのは、埋葬後、当時の地表面などに適宜に配置されたことによるものであろう。

第一次調査によって出土した第二号人骨は、土器との共存関係が確認された稀な例で、遺跡西端より六・三メートル、曲道より一・五メートルの地点に出土し、頭部に接して成川式の壺と甕とが検出された。成川式土器は墓域全面に出土し、埋葬は若干の弥生後期のものを除けば、ほとんどこの時期の遺構といえよう。

鉄器は剣・刀・鏃などの他、少数の異形鉄器を含むがほとんど武器にかぎられ、成川式土器と同様な出土状況を示し、年代も成川式と一致するものと思われる。确实

な副葬品として確認されたものは僅かに七例で、第一次発掘の第三四号人骨では頭部に接して鉄鏃四本と鉞一個が副葬されており、第四次発掘では墓墳に剣一個を出土したものが一基、鏃二本を出土したものが一基、鏃一本を出土したものが四基という貧弱さであった。

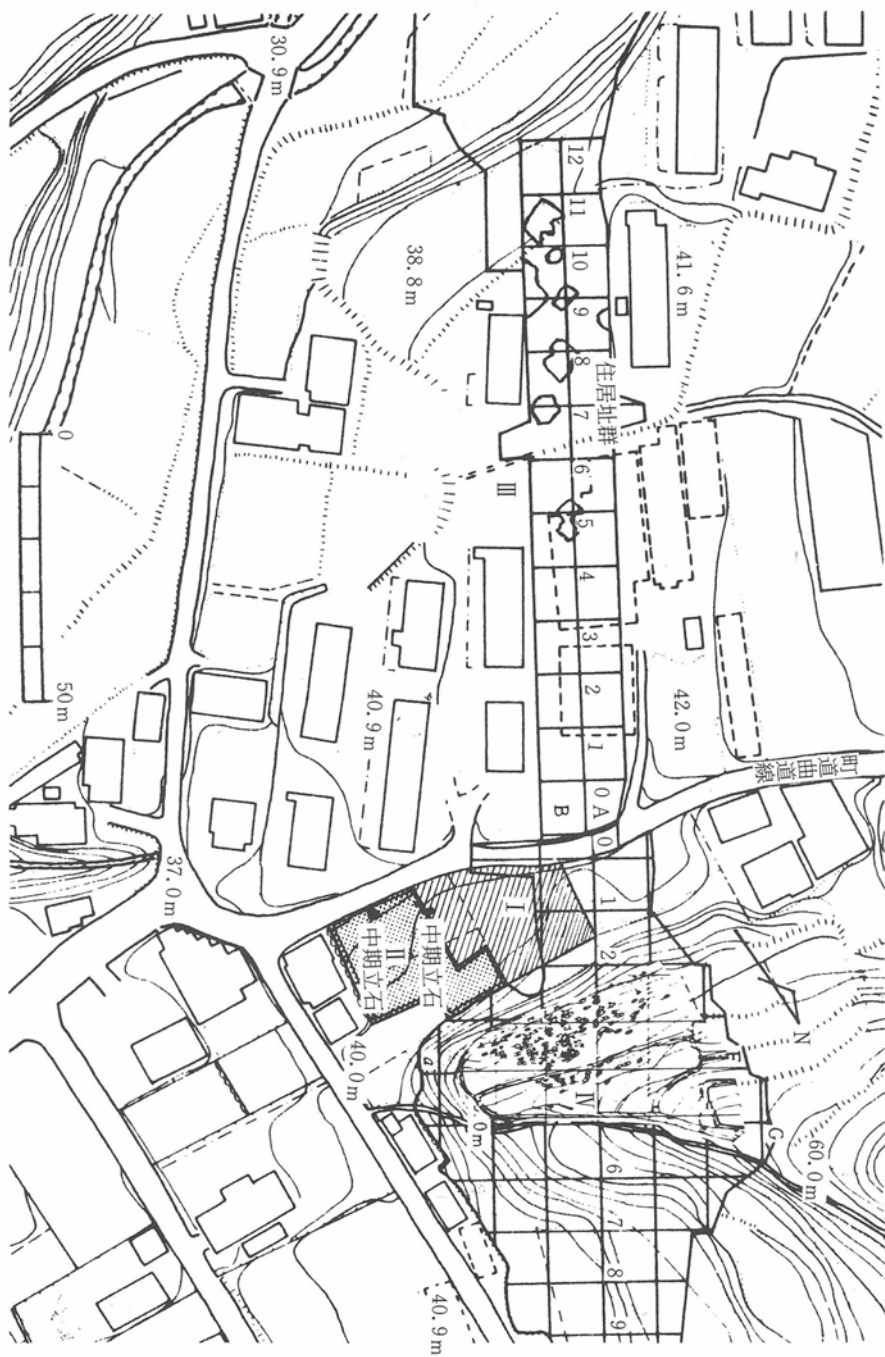
立石の種類

立石には弥生中期に属するものと、古墳期に属するものと及び両者の中間期と思われるものの三種類がある。

弥生中期に属するものは、山ノ口式土器と須玖式土器の出土する地域の両側に配置され、根固石を用いて立石を固定しているもの（根固立石）で、二基配置されている。

東側の立石（第41図2）は幅四一センチ、厚さ一五センチ、長さ二三・五センチで、二個の根固石を用いて、地上に一九六センチを残して埋め、基部に接して浅い土壇を設け、丹塗研磨した美しい須玖式の甕形土器（第40図1）を配置している。（現在は二カ所で折損している）

西側の立石（第41図1）は幅三八センチ、厚さ四センチ、長さ一二・四センチで、一個の根固石を用いて、地上に一〇〇センチ余を残して埋め、基部に山ノ口式の壺形土器を配置している（現在は一カ所で折損している）。両立石の間には山ノ口式と須玖式の土器が分布し、とくに山ノ口式には



第42図 成川遺跡調査図 I : 32年, II : 33年, III : 55年, IV : 56年調査

完形の壺形土器一個と、甕形土器二個の出土が注意される。

この弥生中期後葉遺構の性格を考える場合、浮かぶのが肝属郡大根占町の山ノ口祭祀遺跡である。鹿児島湾に望む当時の砂浜に形成された、時期も同じ弥生中期後葉で、符節を合わせるように山ノ口式土器とこれに相伴して須玖式土器も出土する遺跡である（前出）。立石に沿って軽石を環状に配石し、周囲に壺形土器・甕形土器を配置した遺構で、立石のかわりに軽石製の陰石・陽石・岩偶を配するものもある。性器信仰に基づく祭祀遺構で農耕生産と関連が深いものと思われる。

成川の遺構は環状配石こそ欠くものの、立石が主体となつてこれに土器を配置するという遺跡の構造は全く一致するもので、配置に使用した土器も壺形と甕形に限られている点も同様である。

昭和五十五年の第三次発掘で、中期立石遺構の西南方に七〇センチを隔てた平坦地域に、八基の竪穴住居址群が発見された。いずれも前述の立石遺構と同じ山ノ口式土器を出土する弥生中期後葉の竪穴住居址であった。おそらく数十基の竪穴群からなる集落遺構と思われる、前述の中期立石遺構もこの集落に付属するものと考えられる。これらの竪穴住居址からは、口径五〇センチを計る甕形

土器が出土しており、甕棺製作の技術はあったと思われるが、中期立石遺構では一片の甕棺片も見えていない。このことは中期立石遺構が埋葬址ではない事の傍証ともなろう。

丁字状立石

昭和三十二年の第一次調査では、弥生中期の立石の他に丁字状の立石三基が出土した。遺跡南縁の町道曲道から約八メートルの線上に、遺跡西端から一〇メートル・一三メートル・二〇メートルの地点にそれぞれ一基が検出された（第39図）。いずれも垂直に立てた板石の上に、蓋をするような形で、別一枚の板石を僅かに傾斜をもたせてのせたものである。下石は上の石より幅が広くそれぞれ別個体で、弥生中期の立石のように折れて丁字状になったものではなく、当初から意図した形である。

弥生中期後葉の地表面と、後期から成川期の地表面とは、火山灰の堆積によつて高距に三〇〜三六センチの差があることが判明している。従つて中期の立石遺構は、後期の頃は、基部とともに配置された土器も、火山灰の堆積によつて埋没し、立石は中程から折れて倒れた状態であったと思われる（第41図）。丁字状立石はこの遺構を模倣したものと思われる。

丁字状立石付近からは弥生後期の甕棺葬遺構が発見さ

れており（第40図7）、この地域が成川で最初に埋葬が行われた場所であろう。甕棺葬・壺棺葬は弥生前期末から、薩摩半島に分布がしられており、成川遺跡はその南端に当たっている。T字状立石はこの甕棺葬との関連が考えられ、弥生後期に該当する可能性がある。

古墳期の立石（単純立石）

第一次・第二次の調査地域に分布し、板状又は角柱状の輝石安山岩を使用し、成川式土器が出土する当時の地表面を掘って基部を埋めた立石である。単純な構造で根固石を使用していないために、基部ごと転倒したものが多い。第二次調査地域の中央部の道路（曲道）寄りに検出された、第IV号立石は、成川式の甕形土器二個の上に倒れかかった状態で発見され、所属する時代が明らかになった。この立石は弥生中期の根固立石、同後期のT字状立石の系譜を経て発生した単一の石材からなる立石である。

第一次・第二次・第四次の調査によって墓域の全容がわかり、総面積一、五三六平方メートルあつて埋葬は全域に及ぶものの、立石は山麓部のみに設けられていることが判明した。成川遺跡の西方三一キロメートルにある枕崎市松之尾遺跡は成川遺跡と同種で、単純立石をもつ埋葬址であるが、立石は、成川遺跡と同様に墓域の一部のみに設置さ

れており、標識的な意味をもつものであることがわかる。

松之尾遺跡の立石には、根固石を用いたものや、T字状のものはなく、単一の石材からなる単純立石である。松之尾の埋葬は成川期のものであるから、ここでも成川遺跡と同様に、単純立石は古墳期に該当することがわかる。

特異な供献

北九州地方の合口甕棺・支石墓などの葬法が薩摩半島まで波及し、その末端に成川遺跡が位置していることは明らかである。しかしこれらの埋葬法が、個人墓として遺体を葬り、遺品を副葬する葬法とは異なり、成川では、遺体の埋葬後、土器や鉄器を地表に配置するという特異な葬法が行われている。私有権が定着せず、共有財産であつたためであろうか。

山ノ口遺跡は集落共同の祭祀遺跡であると思われるが、土器などを地表に配置供献する習慣がある。山ノ口の祭祀遺構の流れにつながって発生した成川の埋葬遺構にあつても同様に遺物を地表に供献する遺習が受けつがれたものであろう。

供献された土器の種類を見ると、祭祀遺構の山ノ口遺跡・成川遺跡の中期立石遺構では、壺形土器と甕形土器

が使用され、その割合も両遺跡ともに壺と甕とがほぼ等量に使用されている。一方古墳期になると埋葬遺構に変わった成川遺跡および松之尾遺跡では壺形土器が使用される点では同様であるが、甕形土器が消えて、代りに高杯形土器がさかんに用いられている。

立石墓の性格

成川遺跡の葬制には二つの特異な要素がある。その一つは立石遺構をもつことであり、いま一つは地表供献を行っていることである。この特色をもった埋葬様式は、それを生みだした背景にある社会構造の特色を示すものであろう。

単純立石の遡源と見られる山ノ口遺跡には、石棒・岩偶・陰石が見られる。南九州で土偶が発見されたのは縄文晩期であり、岩偶は縄文後期から晩期へかけて伝播し、材質として軽石を使用して地域色を顕著にしている。その様相を示す代表的な遺跡に、縄文晩期の加世田市^{うさ}上加世田遺跡がある。ここでは集石の縁部に象徴のように石棒を立て、岩偶を甕形土器に納めた遺構が見られる。

岩偶・石棒の文化は弥生時代に引き継がれ、吹上町入来遺跡では軽石製石棒・岩偶が出土している。山ノ口遺跡では岩偶・石棒ともに大型化し、その基部は地面に埋

めた痕跡を残し、また小型岩偶の基底には支柱用の穿孔を有し、いずれも遺跡のなかで立てられていたことを示している。陰石の場合は、石蓋を用い、更にスレートで被覆しているが、上加世田遺跡で、岩偶を甕形土器に納めたのと同好であろう。自然石を人形^{ひしがた}に加工して立石としたものが見られることは、岩偶と立石との関連を暗示するようである。

山ノ口遺跡は縄文晩期の性器信仰と農耕文化の結合によつて生まれた祭祀遺構といえよう。遺跡本来の性格から見て、遺構が地表に露呈されたことが当然の帰結と思われる。しかし祭祀遺構からの流れに乗って生れた成川の葬制は、縄文・弥生を通じて見られたことのない地表における供献という特異な形態を生みだした。

農耕生産に基づく階層分化の結果、生じた支配階層の象徴である高塚古墳は、南九州にあつては、薩摩半島および鹿児島湾東・北地域に関しては一例も見ることができない。成川の立石墓において、副葬品を有する埋葬は七例にすぎず、しかも装身具は一例もない。また埋葬には、同時期の宮崎県児湯郡新富町の川床遺跡で発見された一八七基の土壙墓では、周溝墓など階層差を示す多様の構造をもつものが混在するのに比較して、成川では特別なとりあつかいが見られず、すべて単一構造の埋葬で

ある。このことは成川遺跡に墓地を営んだ集団の階層分化が進んでいないことをものगतるものである。成川遺跡と同様の埋葬遺構は、枕崎市松之尾、指宿市指宿観光ホテル敷地にも存在し、この墓制が定着していたことを示している。

大隅半島東部地域では、前述の川床遺跡に見られる土壙墓の多様化の他、高塚古墳の濃密な分布、地下式横穴の様相などから見て、階層分化が相当進んだ社会であったと思われるが、それに比べて薩摩半島および鹿児島湾東・北岸地域は階層未分化集団の分布する地域であったと思われる。成川式土器の最も主要な分布はこの地域に見られる。例えば鹿児島湾東・北岸では、根占町千束遺跡・大根占町城元遺跡・垂水市柊原遺跡・始良町萩原遺跡などの大きな遺跡があり、薩摩半島では鹿児島市帯迫遺跡・同笹貫遺跡・指宿市丹波遺跡・同橋牟礼川遺跡・同観光ホテル遺跡など湾岸遺跡の他、西岸および南岸では、吹上町辻堂原遺跡・金峰町入来遺跡・枕崎市松之尾遺跡・開聞町仙田遺跡など成川期の主要な遺跡が集中している。

古墳時代にはいつて土師器が使用され、続いて須恵器も出現してほとんどの地域が土師器・須恵器を使用する時代になっても、なお弥生土器の様相を濃厚に残す成川

式土器を使用し、土師器・須恵器は若干を共伴するという様相の背景には、階層未分化即ち、この地域に独特の原始共同体社会集団の存在が考えられる。

県の北部地域を占める地下式板石積石室の分布する地域は高塚古墳文化の波及度、地下式板石積石室の様相などを見ると、大隅半島東部地域と薩摩半島を中核とする地域との中間的な位置にあつて、やや階層分化の行われつつあつた地域といえるであろう。

第二章 松元町の先史文化

第一節 先史時代の概要

松元町における先史時代の遺跡地は二つの地域に集中している。その一つは町の東側で、鹿児島市との境界をなす傾斜変換線に沿った崖端地域で、他の一つは町の南部を西流する永田川の上流地域である。

町の東部崖端地域は、鹿児島湾を形成した始良カルデラのカルデラ壁に望む台地で、この台地は鹿児島湾を囲むようにして北東へ延びている。台地上には旧石器時代・縄文時代の遺跡地が分布し、古くから人類が生息していたことを示している。主な遺跡について見ると、鹿児島

島市川上町加治屋園遺跡は、九州縦貫自動車道建設に伴って県教育委員会が昭和五十年に調査した遺跡である。桜島の初期噴火による軽石礫を含む火山灰層（一万年前）の上からは、縄文前期の塞ノ神B式土器を出土し、同じ火山灰層の下からは旧石器時代後期の細石器と、これに伴って粘土紐を貼り付けた土器片が出土している。この土器は日本で最も古いとされる長崎県泉福寺遺跡出土の豆粒文土器に、施文法が類似しており、本県出土の草創期の土器として最古のものと考えられている。

加治屋園遺跡と谷一つ隔てた西南方にある鹿児島市川上町加栗山遺跡も、九州縦貫自動車道建設に伴って県教育委員会が昭和五十年に調査した遺跡である。この遺跡は舌状台地にあり、調査は一万平方キロメートルの遺跡全面にわたって行われた。

調査の結果、最下層からは旧石器時代後期の遺物群、中層からは、縄文時代早期の集落址、上層からは、中世の山城址が発見された。特に縄文時代の遺構は、中央に広場があり、これをとり囲むように、一六基の堅穴住居址と七七基の土壇が配置された完全な集落址であった。

この外カルデラ壁上には、多くの遺跡があるが、松元町では、仁田尾西の原・木ヶ暮・屋村・小原迫・棧敷原

・城などの諸遺跡がある。このうち、小原迫は押形文土器・条痕文土器などが出土し、松元町では、最も古い時期に属し、木ヶ暮遺跡は縄文後期に属する遺跡として、唯一の発掘調査が行われた遺跡である。この地域では、現在の所、弥生時代の遺跡は発見されていない。

永田川の上流地域は、下刻作用によって深く狭い谷が形成されている。谷の側面は急斜面をなし、シラス台地特有の断崖もしばしば見られ、地肌むきだしの崖面も多い。谷底には、狭い平地ができ、水田耕作に利用されている。

遺跡は、谷に望む台地の縁辺部と、谷底平地にのびる低い舌状台地に立地するが、後者の数は少ない。このうち台地上に立地する遺跡は、縄文時代乃至古墳時代のもので、谷底平地のものは弥生時代と縄文時代である。

台地上に立地する遺跡から出土した土器で、従来、弥生土器と記録されたものが多いが、これは成川式と呼ばれる土器で、その後の研究で古墳時代に属することが判明した。台地上では水田耕作ができなかったためであろうか。一方では、谷底平野に弥生遺跡が立地したのは水田耕作に適する低湿地であったからであろう。

最近の分布調査によると、町北部の畑地で縄文時代早期の石坂式土器が発見されたという。石谷川水系にも古

い遺跡が存在することを示すものであろう。

第二節 遺 跡

木ヶ暮遺跡

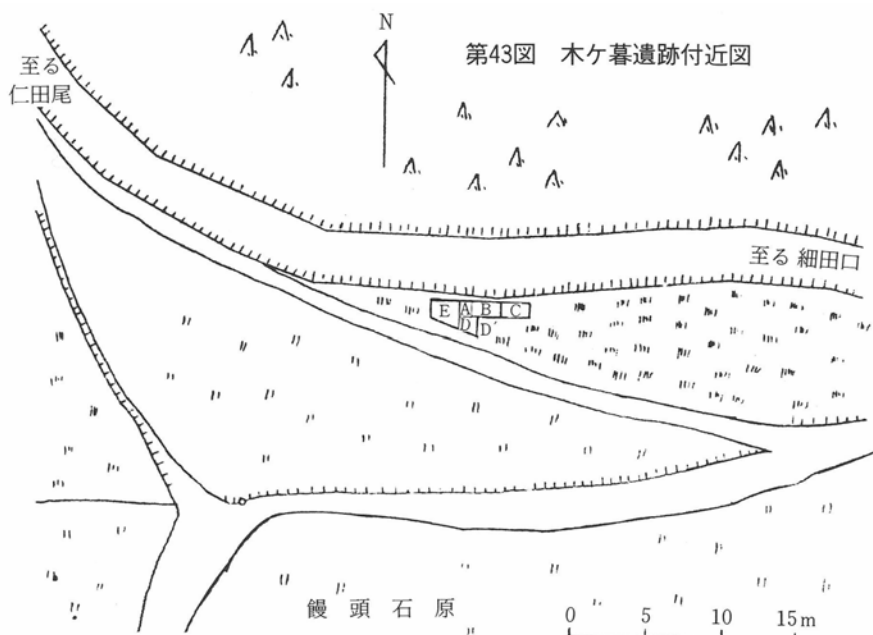
木ヶ暮遺跡は松元町と鹿児島市西別府町の境にある。発掘が行われた当時は、上伊集院町・鹿児島市・谷山町の三行政区にまたがっており、西武田の谷と上伊集院の谷に挟まれて、饅頭石原の高原があり、その北端に存在した。細田口・仁田尾間の農道新設によって発見されたのである。昭和二十七年四月、筆者が発掘調査を行った。

1 遺跡の状況

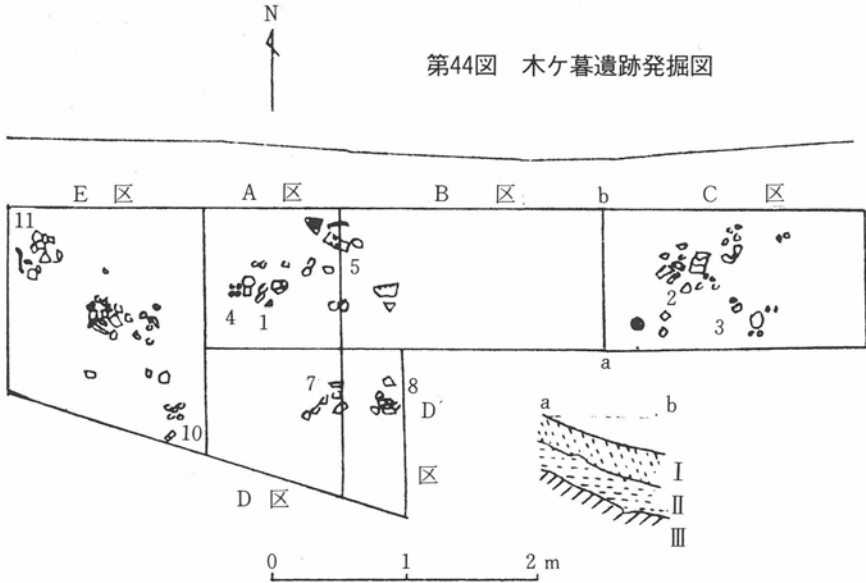
遺跡地は饅頭石高原の北端で、台地から谷への傾斜面にかけて形成されている。調査は台地の縁辺から、斜面へ移り変わった斜面で、上下を農道で囲まれた細長い荒地について行った。発掘の範囲は幅二 m 、長さ一五 m で、地層は、三層に分かれ、表層は黒色の腐植土で、厚さが二三 cm 乃至二六 cm あり、無遺物層である。

第二層は黄褐色で、厚さは三二 cm あり、遺物包含層である。

第三層は黄色の土層で基盤となっており、遺物はほとんど含まない。



第44図 木ヶ暮遺跡発掘図



この遺跡は台地上に集落があつて、谷にむかつて遺物を投棄した際に、堆積してできたものであろう。遺物の出土量は相当豊富であり、土器の種類は単一で、単純遺跡といわれるものである。

2 遺物

石器としては、石弾、叩石、石皿破片を出土しただけで、石斧は出土しなかった。外に北下方の谷で、農道工事の時に出土したと思われる石皿破片、石弾などが発見された。また西方に隣接した開墾地からは、定角式石斧一個が発見された。これは両面に段を有する特殊な物であった。

土器 出土する土器は、縄文後期のもので、主として指宿式土器を出土するが、極少量の市来式土器も出土している。

①市来式土器 表層(第一層)から一片の市来式土器破片が出土している。市来式土器は、市来貝塚から出土する土器を標式とするもので、深鉢形、平底の土器で、波状口縁と平坦な口縁をもつものがある。口縁部の断面が三角形を呈するのが特徴である。

文様は、口縁部の肥厚した部分に施され、貝殻・篋を施文具とし、浅い凹線文と貝殻の縁による押圧文を組合せた物である。

アナダラ属の貝殻を用いて、器面調整を行っている。

この遺跡からは、破片のみで、まとまった物は出土していないが、下層から出土する指宿式土器との層序関係は、縄文後期の編年に、重要な資料となっている。

②指宿式土器 本遺跡出土の土器の中で、主体をなすものである。指宿市十二町下里、橋牟礼川遺跡下層出土の土器を標式とするものである。主に第二層から出土し、基盤の第三層上部に食い込んで出土するものが極少量見られた。

土器は、黒褐色の色調を呈し、器面は粗糲である。器形は深鉢形平底で口縁部は波状口縁と平坦な口縁との二とおりがあり、頸部でしまつて外反するものと、直口とのタイプが見られる。波状口縁と平坦口縁との割り合いはほぼ同率であり、波状口縁では山形の隆起部が四力所のものが普通であるが、三方所のものもある。口縁部に釣り手状の凸起を有するものも一例見られた。

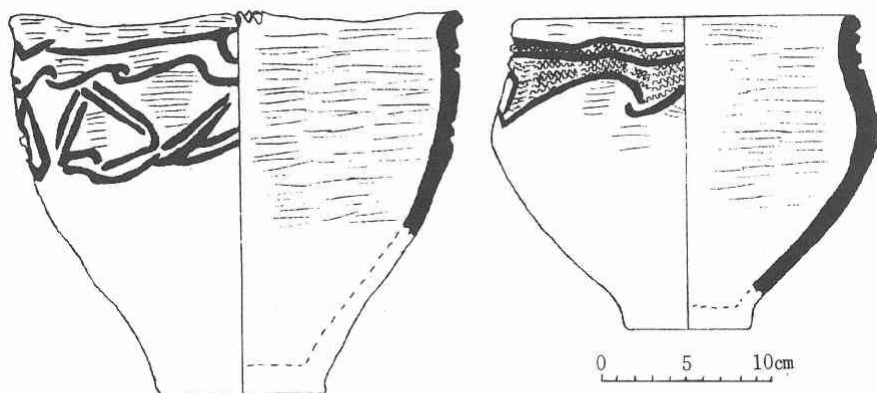
指宿式の文様は、従来二平行曲線文とされてきたが、本遺跡や、谷山地区の平川遺跡では、曲線文のほかに直線文も出土している。本遺跡における曲線文を施す土器と直線文を施す土器との比率は五三対三四である。しかしこれらの土器は、器形などの面では差異は認められない。

文様は口縁部に集約されて施されている外、口縁内面にも施文されたものがあり、その数は全体の土器の一五割に達しており、波状口縁の器形に限られている。また内面の文様は、すべて曲線文である。

土器の底部には特徴があり、網代底のものが三〇割を占め、木葉の圧痕を有する土器も二例発見されている。内一個は網状の葉脈痕と、鋸歯状の縁辺が認められ、「ハルニレ」の葉を使用し、他の一個は平行した葉脈痕が見られ、「ケヤキ」の葉を使用したものと思われる。木の葉の圧痕を有する土器は、桜島町の武貝塚でも発見されており、縄文後期には、木の葉を敷いて土器の製作を行うことがあったと思われる。

土器製作に、貝殻を用いて器面調整を行う手法は、市来式土器の特徴であつて、指宿式土器では見られないものであったが、本遺跡および平川遺跡においては、貝殻による器面調整が行われており、本遺跡の場合は全体の四七割を占めている。直線的な文様を有する土器には、貝殻による器面調整が見られる傾向があり、直線文の出現と、貝殻による器面調整の手法との間になんらかの関係があるかもしれない。

文様のなかで、とくに注意を要するのは、篋がきの二平行線文の間に、貝殻の縁を密接に押圧した偽似磨消縄



第45図 木ヶ暮遺跡出土指宿式土器

文の出現である。瀬戸内から伝播した磨消縄文の影響と思われる。この時期には、指宿式の文様に、磨消縄文を施した土器が、鹿児島市福昌寺遺跡や、春日町遺跡から出土している。

③無文土器 指宿式に属する無文土器が、一七個体、八割出土している。

④その他の土器 指宿式土器と共伴する、磨消縄文土器二個のほか、第二層から阿高式土器一片、出水式土器一片、口縁部に刻み目をつけ、口縁部に沿って幅のひろい凹線を平行に施文した土器片七個が出土している。以上の中で、最後に上げた土器は「岩崎上層式土器」である。

以上、木ヶ暮遺跡について述べたが、この遺跡は始良カルデラ壁に望む高原に立地する縄文後期の集落の一部であって、出土遺物の中に阿高式土器や出水式土器・岩崎上層式土器を含んでいたことは、これらの土器型式との関連を示すものである。即ちこの遺跡の主体を成す指宿式土器は、岩崎上層式土器に後続するもので、出水式土器とは平行関係にあることを示している。

また本遺跡から出土した市来式土器との層序関係から、指宿式土器が市来式土器に先行する事も明らかである。市来式土器が、極少量であったことから考えると、

ここに住んだ市来人たちは、まもなくほかへ移り住んだものであろう。(河口貞徳「南九州における縄文式文化の研究」鹿児島県考古学会紀要第三号)

小原迫遺跡

上床小原迫一四二九。上伊集院駅より南へ約二キロ^北、鹿児島市五ヶ別府との境にある。始良カルデラ壁に位置し、標高二三〇^北で、南と北の小丘に挟まれた鞍部に立地している。

昭和三十七年の調査当時は、開墾後で赤土と黒土の混じった畑地であった。中央が小高く、断面に現れた地層では、地表下約一^北の黒褐色層が遺物包含層である。

遺物としては、石斧・石鏃・石皿各一個のほか、押型文土器・貝殻条痕文土器が出土している。

遺物包含層はアカホヤ層の下^北の黒褐色粘質土と思われる。縄文早期の遺跡で、本町では、最も古い部類に属する遺跡である。現在は蜜柑畑となっている。(昭和三十七年、河野治雄調査)

東部崖端地域の諸遺跡

以上に上げた遺跡以外では、現在判明している遺跡について見たところでは、いずれも古墳時代に属するものである。恐らく弥生文化はこの台地上には、定着できなかったのではなからうか。

東昌寺遺跡

松元町直木東昌寺字宮田五〇一一番地〜五〇一二番地、若松秋吉氏所有地である。永田川が、シラス台地を浸食して出来た谷頭低地に延びた、舌状台地の先端部に立地する。

遺跡は若松氏が、宅地に続く荒地と山林を開墾したことが導因となつて、当時上伊集院中学校の教諭中原尚文氏及び松崎良博氏が発見し、昭和二十七年六月筆者が発掘調査を行った。

1 遺跡の状況

遺跡地は、永田川が牟田に源を発して北流し、山方の辺で、大きく湾曲し西へ流れを変えるあたり、南から北に向かつて張出した舌状台地の先端に立地している。標高は一三七^北、周辺の水田面からの比高は七^北である。地形は南から北に向かつて緩やかに傾斜し、台地の北東隅に若松氏の宅地がある。調査は住宅に西隣する開墾地について行った。地形の傾斜に沿つて南北方向に幅二^北、長さ八^北のトレンチを設け、二^北ごとに区画して、調査単位とし、南よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区として発掘を行い、更にⅡ区を基点として、西方向へ幅二^北、長さ六^北のトレンチを増設したが、このトレンチからはほとんど遺物は出土しなかった。

地層は、第一層は黒色土層で、厚さは三五センチあり、遺物包含層である。第二層は黄褐色土層で基盤と思われる。調査の結果Ⅰ区とⅡ区には、芋貯蔵用と思われる穴が、基盤下七五センチの深さに掘りこまれていた。遺物包含層は耕作によって相当攪乱されていたが、Ⅰ・Ⅱ区には保存状況のよい部分もあった。遺物は新設の西トレンチを除き各区に、弥生前期の土器を主として出土し、Ⅳ区では縄文土器も出土した。

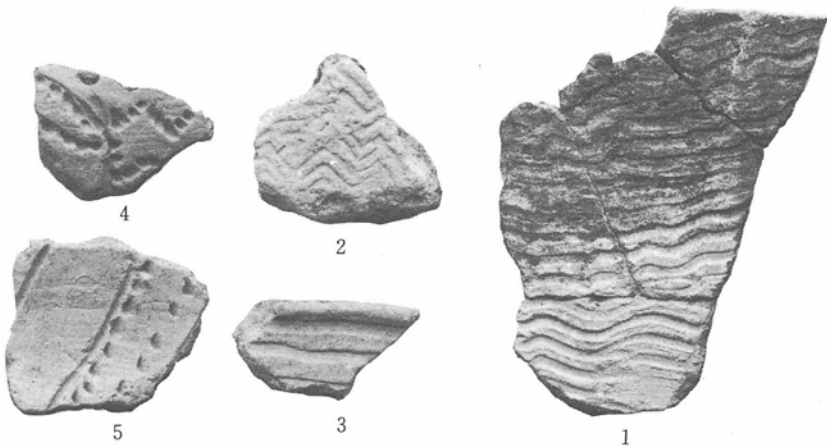
第二層の黄褐色層は、鬼界カルデラ起源のアカホヤ層と考えられるが、縄文土器の中にはアカホヤ層以下にしか存在しない土器も含んでいるから、これらの遺物は、開墾時または芋穴作りの際に、掘り出されたものと考えられる。

2 遺物

若松氏が耕作中に集めた遺物には、弥生前期の土器のほか、縄文後期の市来式土器・御領式土器・刺突文土器・貝殻条痕文土器・貝殻の縁で押圧した文様を有する土器・縄状の凸帯を貼付する土器などの縄文土器。

径七センチの小形銅鏡二面（二面のうち、文様のある一面は学校に保管しているため、見る機会を得なかった）古墳時代の須恵器などが見られた。

発掘によって出土した遺物も、同様の物であった。次



第46図 東昌寺出土縄文土器

1：円筒形条痕文土器
2：押型文土器
3：曽畑式土器
4,5：春日式土器

にそれらについて述べよう。

① 縄文式土器

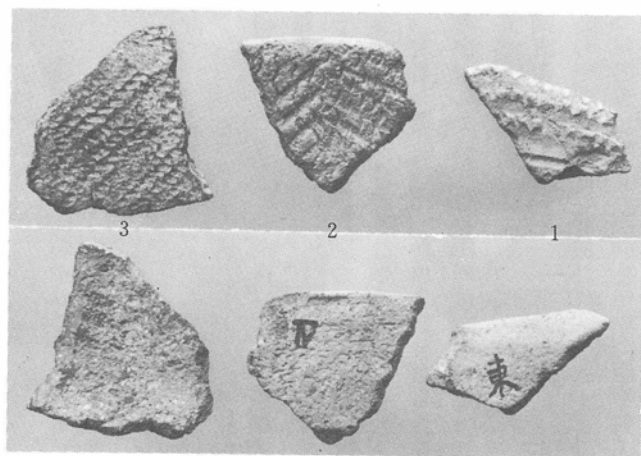
円筒形条痕文土器 円筒形平底の土器で、口縁部は平坦である。器壁は厚く一・一〜一・二センチあり、口縁部から胴部にかけて、アナダラ属の貝殻を施文具として、波状の条痕文をめぐらす。口唇部は丸みを有し内面は篋磨きして平滑である。胎土に白粒子を含む。小山遺跡や石峰遺跡に出土する円筒形条痕文土器に類するもので、縄文早期に属するものと思われる(第46図1)。

押型文土器 山形押型文土器である。色調は黄褐色で、胎土に白粒子を含み、器壁は厚く一・三五センチ余りである。前述の円筒形条痕文土器に平行する時期で、縄文早期に属する(第46図2)。

曾畑式土器 熊本県曾畑貝塚出土の土器を標式とする土器型式である。本遺跡出土の土器は、口縁部で、やや外反し口唇部は平坦で外傾している。文様は、口縁部には平行沈線、口唇部と口縁部内面には連点文を施している。器壁は薄く約八ミリで、胎土は粒子が細かく、雲母・白粒子を含む。焼成は良好で、色調は黄褐色である。縄文前期後葉に属する(第46図3)。

春日式土器 春日遺跡出土の土器を標式とする土器型式である。本遺跡から二片出土している。口縁部がキャ

リッパー型に内湾するのが特徴であるが、一片はその特徴を示している。器壁はいずれも薄く六〜七ミリである。器面は内外とも、浅く細い貝殻条痕で調整され、文様は沈線と連点文で飾られている。色調は黒褐色及至黄褐色で焼成は良好である。縄文前期後葉に属する(第46図4・5)。

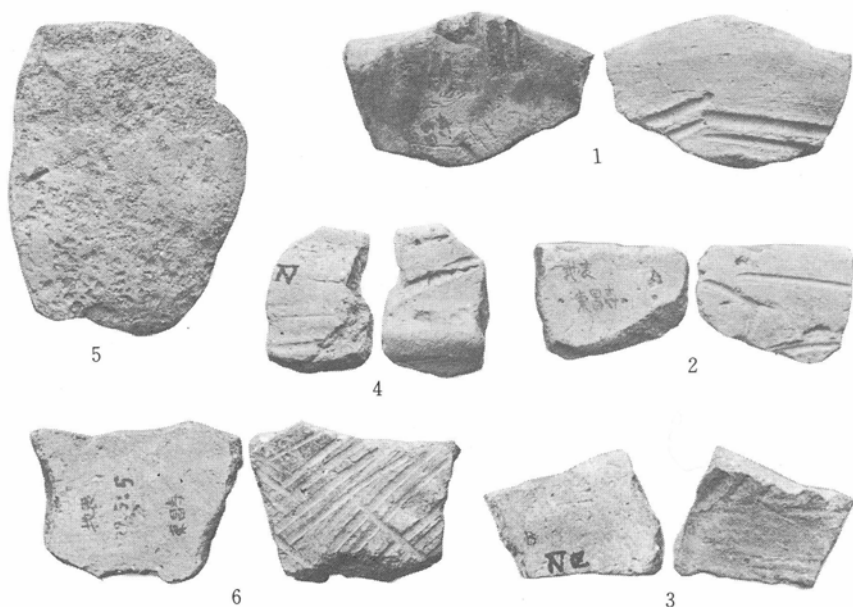


第47図 東昌寺出土縄文土器

平栴式土器 平栴貝塚出土の土器を標式とする土器型式である。小片であるが、口縁部であるために、平栴式土器の特徴を良く示している。波状口縁の部分で、口縁部に二条の刻み目のある細隆帯と、一条の沈線文を施し、口唇部には刻み目がみられる。黄褐色で焼成はよい。縄文前期前葉に属する（第47図1）。

貝縁押圧文土器 第47図2に示す土器で、型式名は付いていない。やや外反する平坦な口縁部の破片である。口唇部は平坦で外傾し、器形は円筒形かとも推測される。胎土は粒子が細かで、白色の粒子と雲母をわずかに含む。器壁は厚さ七ミあり、色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。文様は、貝殻を施文具として、口縁部に沿って綾杉状に沈線文を施し、その上に重ねて貝殻腹縁による押圧文を加えたものである。施文法・器形から見て縄文早期に属するものと思われる。

偽似縄文土器 第47図3に示す土器である。口縁部に近い部分の破片である。器壁は薄く五ミ六ミで、胎土には白色の粒子を含み、焼成は良好で、色調は黒褐色である。文様は貝殻と思われる櫛状の施文具を用いて、一見、斜行縄文と見誤るような文様を施している。志布志町柳遺跡においても類似の土器が発見された例がある。縄文早期に属するものであろう。



第48図 東昌寺出土縄文土器

指宿式土器

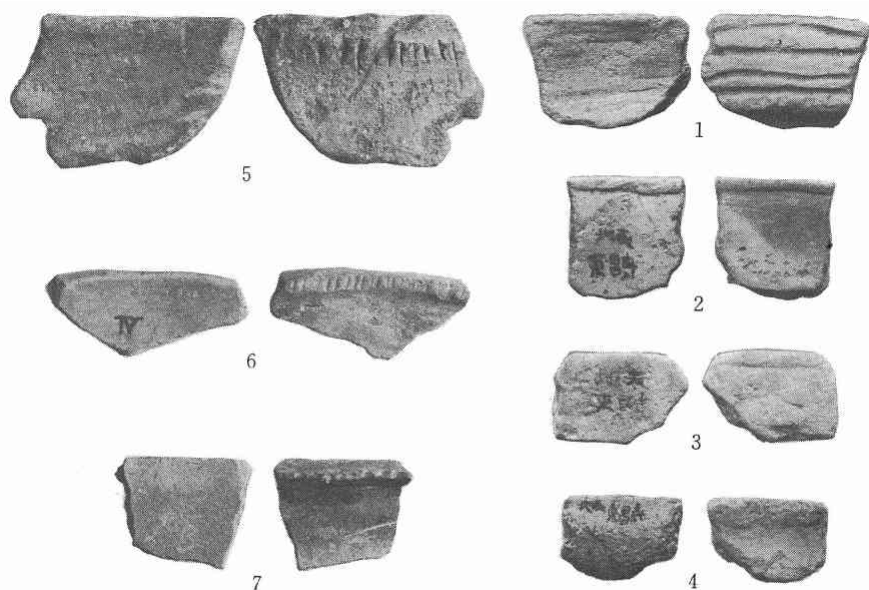
指宿市橋牟礼川遺跡、下層出土の土器を標式とする土器型式である。第48図1・2に示す土器である。波状口縁と平坦な口縁とがあり、深鉢形平底の器形で、口縁部に二平行曲線文または直線文をめぐらし、波状口縁の場合には、山形隆起部の内面に施文するものも見られる。本町では木ケ暮遺跡から多量出土している。縄文後期前葉に属する。

市来式土器

市来貝塚出土の土器を標式とする土器型式である。第48図3・4に示す土器である。深鉢形平底の土器で、波状口縁と平坦な口縁のものとがある。口縁部の断面が三角形を呈するのが特徴で、三角形に肥厚した部分が文様帯になっている。器面調整や施文具として貝殻が多用されている。4の土器は口縁部の破片で、色調は黄褐色を呈し、表面の文様帯には貝殻の縁による、刺突文のみを施しており、市来式としては古いタイプである。3の土器は口縁部の下に続く部分の破片である。一部に貝殻による刺突文が見えるのは、文様帯の外まで施文したもので、新しいタイプである事を示している。色調は黒褐色である。

第48図5・6の土器

5の土器は、口径二二センチ、高さ一〇・三センチの深鉢形平底、無文土器である。胎土は粒子がわりに細かで、白色の粒子を混じ、焼成は良く、器壁



第49図 東昌寺出土縄文土器

は〇・九〜一・一センチあって厚い。色調は紅褐色である。土器外面は風食のあとが見られる。

6の土器は、幅七センチ、高さ五センチ、厚さ〇・九センチの破片である。胎土は粒子がわりに細かで、焼成は良好である。表面は灰褐色、裏面は黄褐色を呈し、文様は浅い沈線を、左右から斜行して密接に施文している。裏面には貝殻による器面調整の跡が見られる。共に縄文土器と見られる。

第49図1の土器 口縁部が肥厚して文様帯を成す土器である。文様帯には、四条のやや湾曲した沈線文を施し、沈線内に、刺突を加えた部分が見られる。口唇部と文様帯の下縁に刻み目を施す。胎土は粒子が細かでわずかに雲母を含み、色調は黄褐色を呈する。貝殻によって器面調整し、後で仕上げを行っている。縄文土器ではあるが、型式名は付けられておらず、時期についても確定する資料が現在の所発見されていない。

黒川式土器 第49図2・3に示す土器である。黒川洞穴出土の土器を標式とする型式である。精製土器と粗成土器とがあるが、2・3の土器は精製土器である。浅鉢形土器の口縁部で、内外に沈線を施す。胎土は粒子が細かで器面は研磨されており、一般に黒色の物が多いが、本例は黄褐色である。縄文晩期に属する。3の土器も同

時期と思われる。

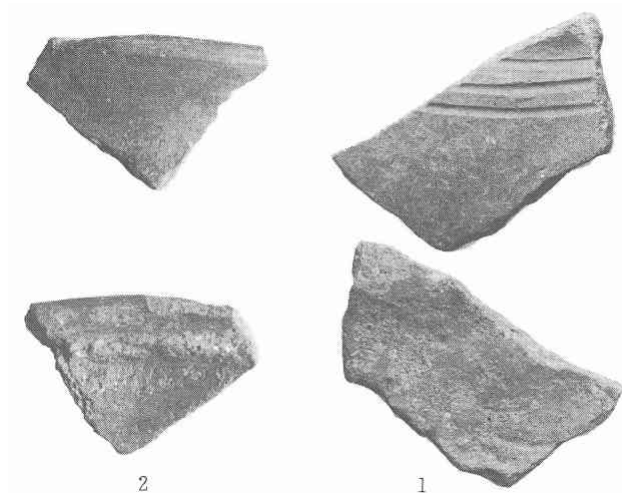
夜臼式土器 福岡県夜臼遺跡出土の土器を標式とする土器型式である。第49図4〜6に示す土器で、口縁部に刻み目のある凸帯をめぐらすのが特徴である。5の土器は凸帯がややさがった位置にあり、直口の深鉢で、器壁は厚く一センチあり、器面に貝殻による調整の痕が見られる。6の土器は浅鉢形で器面は研磨されている。7の土器は断面三角形の細い凸帯を、口縁部に沿ってめぐらし、その位置は三者のうちで、最も口唇部に近い位置に貼付されている。

以上、東昌寺遺跡出土の縄文土器について述べてきたが、発掘面積が狭いために、遺物の出土量は少ないものの、時代は縄文早期から晩期まで、中期を除き、ことごとく網羅しており、この遺跡が長期にわたる生活地域であったことを示している。

② 弥生式土器

壺形土器 第50図1・2に示す土器である。1は頸部から胴部へ移行する部分の破片である。頸部と胴部の境には沈線をめぐらし、胴部は一段高くなりこの部分にも二条の沈線をめぐらしている。胎土は粒子が細かで、器壁は厚さ九ミリあり、器面は篋磨きし、色調は紅褐色で焼成はよい。胴部がはり頸部から口縁部へしまつて、口縁

第50図 東昌寺出土弥生土器



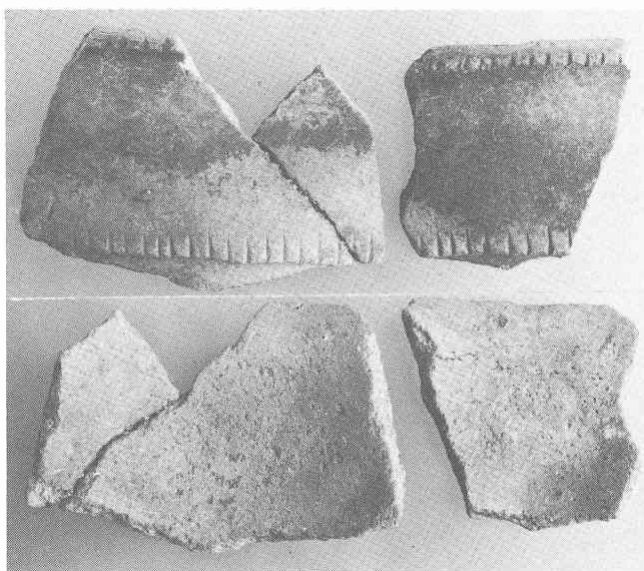
端で外反する平底の壺形土器で、前期前葉の時期である。

2の土器は、壺形土器の口縁部破片である。頸部から口縁部へしまつて外反する部分で、内面に断面三角形の凸帯をめぐらしている。

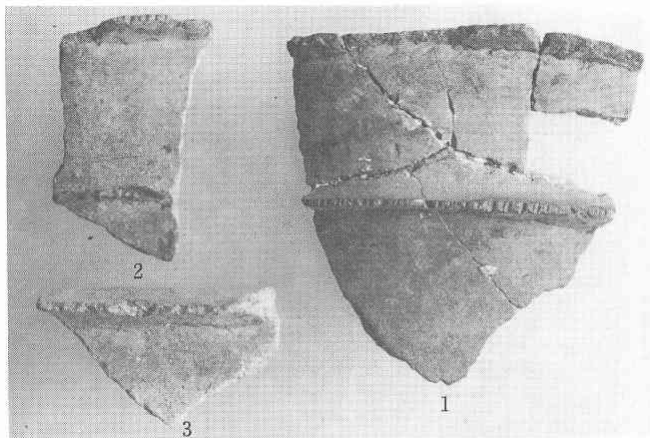
胎土に白色の粒子を含み、焼成はよく、色調は黒褐色で、器面は篋磨きされている。前期前葉の時期に属する平底の壺形土器である。

甕形土器 第51図〜第55図に示す土器の内一部を除き、すべて甕形土器である。いずれも前期に属するが、

時期には若干の差異がある。第51図に示す土器は一見二条の凸帯をめぐらすように見えるが、上部は外傾する口唇部の稜線に刻み目を施したもので、下部は頸部から胴部へ移行する部分に段をつくりこれに刻み目を施したものである。器形は胴部の張りが弱く、口縁部は外反す



第51図 東昌寺出土弥生土器



第52図 東昌寺出土弥生土器

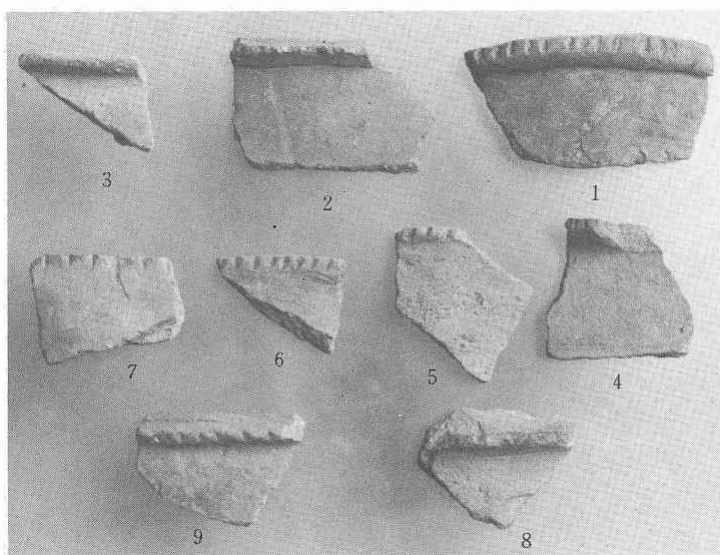
る平底の土器である。高橋I式に属し前期前葉の時期である。

第52図1

・2の土器は二条の薄い刻み目凸帯をめぐらすものである。口唇部に狭い平坦面を有し、内側へもわずかに張出しが見られる。胴部の張らない平底の土器である。前期に属するが、前者より新しい時期と思われる。

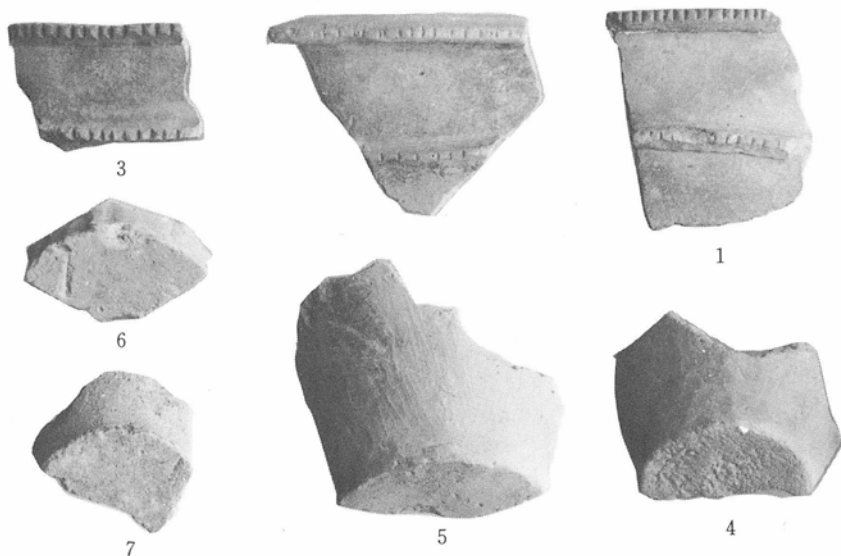
3の土器は、口縁部にめぐらす刻み目凸帯の位置がわずかに下がり気味で胴部はやや丸む器形である。

第53図1に示す土器は、薄鋸状の凸帯をめぐらし、二

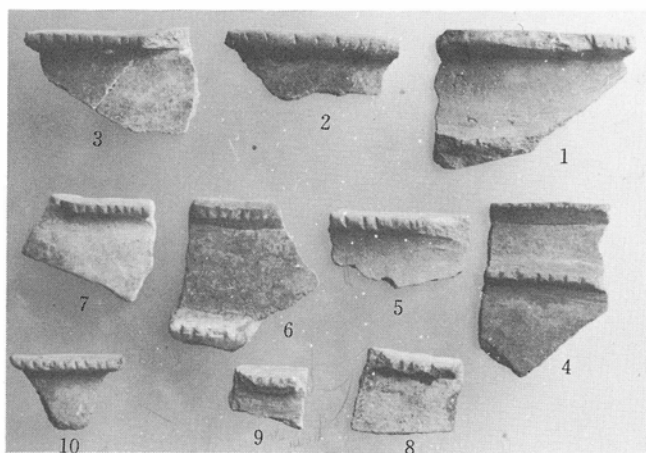


第53図 東昌寺出土弥生土器

又の施文具を用いて、浅い刻み目を施している。円い棒状の粘土紐を、口縁部に貼付したもので、夜臼式に近い。2・6・8・9の土器は断面三角形の刻み目凸帯



第54図 東昌寺出土弥生土器



第55図 東昌寺出土弥生土器

を、口縁部にめぐらすもので、凸帯の付着する位置が下がり気味で、前期前葉に属する時期と思われる。
3・5・7の土器は凸帯を貼付せず、直接口唇部に刻み目をほどこしたものである。前期前葉に属するものであろう。

4の土器は、口縁部が強く外反し、口唇部に刻み目を施すもので、頸部と胴部との境にも刻み目凸帯をめぐらしている。前期の土器である。
第54図1
く3に示す土器は、い

ずれも二条の刻み目凸帯をめぐらす土器である。

1と3の土器は口縁部上面が水平で、幅が狭いが、2の土器は、口縁部上面はやや外傾し、幅は前者より広い。1・3の土器は前期前葉に属するが、2の土器は胴部の張りも見られ、前二者より新しいものと思われる。

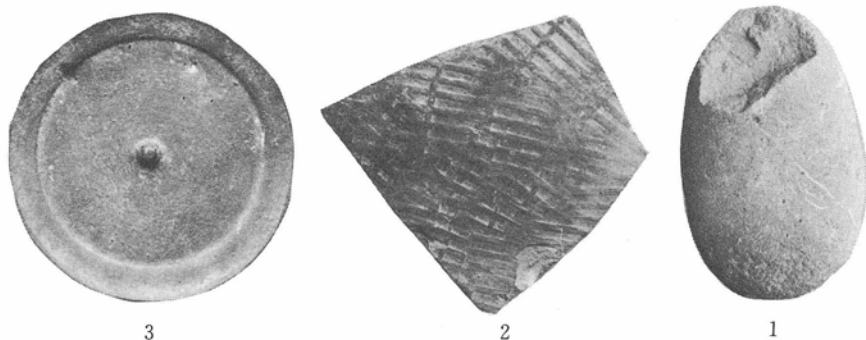
第55図1～10に示す土器は刻み目凸帯をめぐらす平底の甕形土器である。このうち1・3・5・10の土器は、口縁部上面が平坦で比較的幅が広いが、4・6・9の土器は、口縁部上面の幅が狭く、6・8・9の土器は特に口縁部上面が外傾して、古いタイプと見られる。以上の第55図に上げた土器は、いずれも前期に属するものである。

第54図4～7に示す土器は、いずれも底部であるが、質が緻密で焼成がよく、色調は黄褐色を呈し、前に上げた甕形土器に類似している。内面をみると、壁面から底面への移行部分に、境界線が見られず、曲線をなして下っている。

5の土器は外面に篋磨きが見られ、4にも研磨の痕がある。6は底部外面に指の圧痕が著しく、4にも若干見られる。5は煮沸の痕跡が明瞭で甕形土器の底部である事が明らかであるが、他も同類と思われる。すべて前期の土器である。

東昌寺遺跡は、

鹿児島県において、発掘によって弥生前期の土器を出土した最初の遺跡である。高橋貝塚がある。高橋貝塚が有名になり、最初に発見された遺跡のように考えられているが、実は高橋貝塚の発掘よりも十年も前に発掘されていたのである。当時の弥生前期に対する認識が充分でなかった事と、調査面積が狭く出土遺物の量が少なかった事が東昌寺遺跡の認識を普及させなかった原因であろう。



第56図 東昌寺出土遺物

③ その他の遺物

第56図1～3に示す遺物である。1は六・八×四・二×二・六センチの砂岩製叩石で、縄文期に属するものである。

2は格子ふうの叩目を有する須恵器甕の破片である。3は径七・四センチの素文青銅鏡である。縁は三角縁に類するもので、素鈕であるが、紐穴は無い。外区と内区の境目付近に、二孔を有し懸垂したものである事を示している。祠の神体としていたものであろう。この外に、成川式土器の出土も見られる。

以上に見てきたように、東昌寺遺跡は、そのすぐれた環境のために、極めて早い縄文早期から、ほとんど連続して縄文晩期、弥生前期と人々の生活の場となってきた。とくに弥生文化が発生と同時に、この谷間の奥地にまで波及していたことに驚くとともに、本遺跡の重要性が見直されるのである。（文献 川上四郎「東昌寺遺跡発掘報告」鹿児島県考古学会紀要第二号）

山方遺跡

直木山方五二三五番地。東昌寺遺跡の北、川を挟んで対岸の山裾にある。宅地のうらて断崖に、遺物包含層が露呈している。崖面はおよそ高さ二・五メートルあり、地表面からおよそ一・三メートルの深さに、厚さ六〇～六五センチの褐色の土層があつて、これが遺物包含層となつてゐる。弥生

土器が出土する。この他永田川の谷には松山原・ロノ坪などの遺跡が分布している。（昭和三十七年、河野治雄調査）

立元遺跡

直木立元四九六四番地、東昌寺遺跡の南台地上にある。塞ノ神式土器・石鏃などが出土している。縄文前期・中期の遺跡である。東昌寺遺跡周辺の台地上には、この他、小中原・西畑トドンなどの縄文遺跡があつて、同時代の遺跡が多く分布している事を示している。

小松迫遺跡

町の北部、新村小松迫、県道沿いの畑地である。最近、鹿児島大学法文学部学生の桑畑光博が、石坂式土器の口縁部四片と石鏃一個を採集した。石坂式は知覧町石坂上遺跡出土の土器を標式とする型式で、縄文早期初頭の土器である。本町で、これまで発見された遺物の中では、もつとも古い遺物である。この発見によつて、本町の歴史が一举に縄文早期初頭まで遡ることになった。石谷川上流地域には、小松迫遺跡の周辺に、幾つかの遺跡の存在が推定され、始良カルデラ壁遺跡群・永田川上流遺跡群と共に、石谷川上流遺跡群が第三の遺跡群として登場することが想定できるようになった。

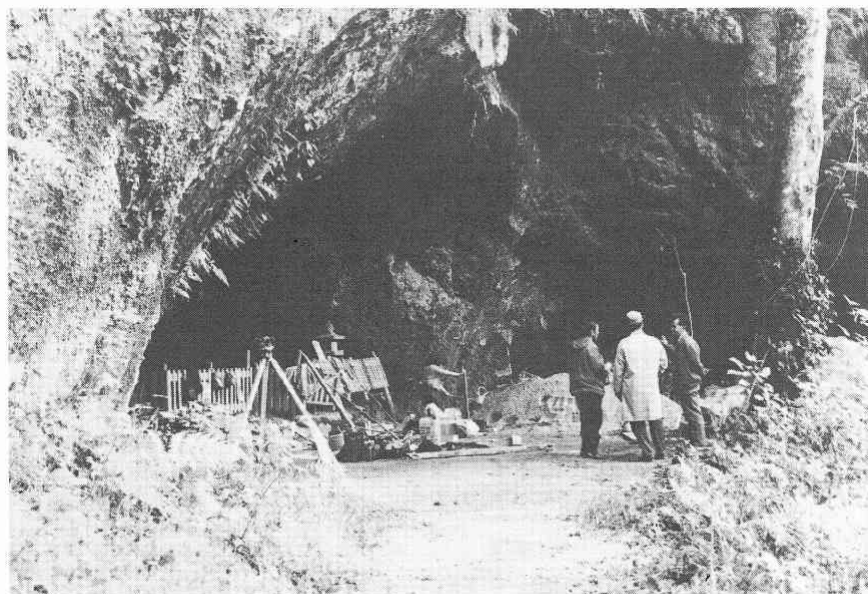
黒川洞穴遺跡

吹上町永吉砂走、本町南部の田頭に源を発する二俣川の右岸、山麓二合目程のところに開口した洞穴遺跡である。昭和二十七・三十九・四十・四十二年の四次にわたる発掘調査を、筆者らが行った。

洞穴は大小二個が隣接しており、西側の大洞穴は、入口の幅は一三・三メートル、高さ六メートル、奥行きは不明で、入口付近に黒川神社の祠が建てられている。東側の小洞穴は入口の幅は一・一メートル、高さ四・三五メートル、奥行きは八・四メートルで、平面は馬蹄形である。第一次から三次までは小洞穴、第四次は大洞穴の発掘を行った。

両洞穴共に、縄文前期から弥生中期に至る遺跡で、縄文では前期の竈Ⅱ式・曾畑式、中期の阿高式、後期の南福寺式・指宿式・市来式・西平式、晩期の黒川式などを出土し、弥生では、前期・中期の土器を出土している。このうち黒川式は、九州で初めて発見された縄文晩期の土器型式で、従って黒川洞穴は、同じく最初の遺跡ということになる。

土器以外の遺物には、石器としては、石斧・石鏃・石匙・叩石・石皿・軟玉製垂飾の外、土器の塗料に用いた酸化鉄の塊が出土し、骨角牙貝製品では、貝輪・巻貝製垂飾・骨製筭・動物の歯で作った垂飾・骨篋など豊富な



第57図 黒川洞穴

出土が見られた。

特殊なものとしては、黒川式の粗製鉢形土器の内面と外面に線刻画を描いたものがあり、内面には人が手をひろげて立っている様子、外面には冊と思われるものが表現されている。狩猟にでも関するものであるうか。

遺構は東側の小洞穴によく遺されており、深部に竈Ⅱ式の炉址があり、上面には、晩期の遺構があり、真ん中には立石をもった土壇墓、周辺には貝類・動物骨などを入れた土壇が一五基発見された。

自然遺物としては、貝類の外に、動物骨があり、その

うち哺乳類は、イノシシ・シカ・カモシカ・ツキノワグマ・オオカミ・イヌ・タヌキ・アナグマ・テン・イタチ・ノウサギ・ムササビ・モグラ・サルの一四種類があり、イノシシ・シカが全体の八五・六割をしめている。このうちで、オオカミ・ツキノワグマ・カモシカは現在鹿兒島県下には生息しないという。

哺乳類以外ではキジ・ガン・カモ・ハト・ワシタカなどの鳥類、サメ・マダイ・クロダイ・フナなどの魚類の他カメ・カエルなども出土しているが、その量は少ない。